京都府立大学学術報告（人文）第 73 号　(2021 年 12 月)

ロバート・バートン
『憂鬱の解剖』
第 3 部 第 2 章 第 3 節 第 1 項

岡　村　眞紀子
伊　藤　博　明　　訳

第 2 章第 3 節第 1 項
愛の憂鬱症の症状、すなわち
身体的、精神的徴候、良きもの、悪しきもの。

症状は身体的なものであったり、精神的なものであったりする。身体的なものとしては、蒼白、痩弱、乾燥などで、「**恋する者はみな蒼白、この色は恋する者たちに特有のもの**」〈『恋愛術』1. 729.〉、[「**まさに恋がこの色を創り出す**」『変身物語』4. 〈203.〉]、「**恋が痩せさせる**」〈同書　11. 729.〉と、詩人［オウィディウス］が言っているとおりである。またアヴィケンナは〈『医学典範』3. 1. 4.〉第 23 章〈正しくは第 22 章〉「熱愛について」で、「この病の症状である、虚ろな眼や乾燥した身体が、独り微笑したり、なにかしら心愉しいものを見たり聞いたりでもしたかのように振舞うようになる」と言い、ヴェルリオラ（『医学総鑑』第 2 巻第 7 章)、デュ・ローラン（〈『視覚疾病、憂鬱症、カタル、加齢等に関する対話論議』〉第 10 章)、エリアーニョ･モンタルト（『病理学大全』〈第 5 論攷 5.〉「英雄的愛について」)、そしてランゲ（『医学書簡集』第 1 巻第 24 書簡）も同様に、「**身体は血の気を失って蒼白となり、痩せ、眼は虚ろになる**」と言っている。

――素足で蛇を踏んだ人のように、
〈ユウェナリス『諷刺詩集』1. 43.〉

眼が虚ろになって顔面にめり込んでしまう、

輝くばかりの身体の繊細な優雅さも衰える。
［セネカ〈『ヒッポリュトス（パエドラ)』378.〉］

不眠や心労や嘆息でやつれ果てていく、

ポイボスの松明の印を宿す
眼は、祖先の一族らしさで瞬くことはない。
〈『ヒッポリュトス（パエドラ）』379-80.〉

呻吟、悲痛、悲哀、倦怠で、

――もはや彼女はいかなる穀物にも健康にも
心遣いをもちあわせていない――
［セネカ『ヒッポリュトス（パエドラ）』〈373-74.〉］

そして食欲もない等々。こういった事すべての理由は、ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデが言うに、「スピリトゥスの縮小により肝臓が本来の働きをなさず、滋養物をあるべきように巡回させないことで、それゆえに四肢が栄養不足で弱り、五月にわが家の庭の薬草が雨不足のために弱るように、痩せる」［『脳の病、情熱的愛について』〈19「恋する者たちについて」〉］。ゆえに、きわめてよくある、男女が通常陥る嘆息、歎き、悲しみだけではなく、若い女性には萎黄病、男性には悪液質、またの名を悪体質がしばしば起こる。蒸留器から滴が落ちるように、

閉じ込められた火から水が滴るように、
〈ヘインシウス『愛のエンブレム集』3.〉

クピドの火は真の恋人たちの眼から涙を誘う。

力強いマルスはしばしばウェヌスゆえに叫んだ、
女々しい涙で
その恐ろし気な頬を秘かに濡らして、――
［スペンサ『妖精の女王』第 3 巻第 11 歌〈44. 3-7.〉］

――火は水中へと滴り落ちる、
顔を濡らすあまたの水が証人となろう。
［〈ヘインシウス〉『愛のエンブレム集』3.］

同じような多くの感情についてもヘリオドロスが書き示しているように、カリクレアがテアギネスに惚れ込んだとき、「彼女は半狂乱になり、訳の分からぬことを口走り、独り溜息をつき、よく眠らず、急に痩せていった」［〈『エティオピア物語』〉第 4 巻〈7.〉］。そして義理の息子に夢中になった時には、**蒼白に容色衰え、眼は虚ろになり**［アプレイウス〈『変身物語』10. 2.〉］、絶え

ず物思いに沈み、溜息も途切れがちであった。エウリアルスは愛人ルクレティアに送った手紙で、他の悲嘆とともに、「**あなたは私から眠ることも食べることも奪い取ってしまった**」［エネア・シルヴィオ・ピッコローミニ〈『書簡集』114.〉］と嘆く。同様に彼〈騎士〉は巧く表現する。

彼の眠り、食事、飲み物は彼から奪われた。
そのあまり彼はどんどん痩せ、槍のように干からびていった。
眼は虚ろ、見るもおぞましくなり、
顔は蒼ざめ、様相は灰のように血の気を失った。
そして、いつも独り、
そして、夜ごと眠ることなく思いを馳せた。
［チョーサ〈『カンタベリ物語』〉「騎士の話」〈503-08.〉］

テオクリトスは『牧歌』第２歌で、デルポイの美しい娘をミンダの若者に惚れさせ、このように告白させている。

眼にするや否や私は正気を失った。まるで魂が悪い影響を受けたように。
私の美は惨めなものへと衰微し、私はもはや、どんな祭列にも
心を致さなくなった。家に戻ってからは、
自分には解らないながら、ある病が私を燃え上がらせて衰弱させ、
私は十日十晩、床に伏し、
髪は頭から抜け落ち、残ったものといえば
骨と皮だけだった。
［『牧歌』2.〈82-86, 88-89.〉］

こういった情念はすべて、かの英雄詩人によってディドの人物像において巧く表現されている。

心の内で不幸なフェニキアの女王は、
眠りにつくこともなく、眼と心に愛を受け取ることもなく、
心の嘆きを倍にして、起き上がってしまい、
愛は怒りとなって……
［ウェルギリウス『アエネイス』4.〈529-32.〉］

同じように、ヤコポ・サンナザーロの『牧歌』（2「ガラテア」）でのリュコリス〈正しくはリュコン〉は眠れずに苦しみ、溜息をついてはむせび泣き、嘆いてやつれていく。また、エウスタティオスのイズメネオスはもっと苦しみ、「恋する乙女を眼にするたびに息ができなくなり」、眠ることも

できず、ベッドは茨であった。不眠や食欲不振といった通常の症状はみな痩せさせる［ド・ゴルドン『医学の百合』第20章］。そういう風にして恋する者たちはときには、あまりに弱り、変わり果てるので、彼［テレンティウス］が喜劇で揶揄するように、「誰も、同じ人だとはほとんど気づかない」［『宦官』〈225-26.〉］。

眠らぬ夜が若者たちの身体を痩せ細らせ、
ここに心煩いと悲しみが大いなる愛から生じる。
〈オウィディウス『恋愛術』1. 735-36.〉

恋人たちを見極められる同様の多くの症状が身体に現われる。

――というのも誰が愛をうまく隠せようか。
［オウィディウス『名婦の書簡』12.〈37.〉］

人は胸の内に炎を抱きつつ燃やさないことなどできるのかと、ソロモンが『箴言』（6. 27.）で言う。人は隠すためにできるだけのことをするが、愛の炎が隠されることはほとんどない。

千の徴以上のもの――

となって現われるが、次のようにも表現される。

覆われれば覆われるほど、火は覆われたままで燃え上がる。
［オウィディウス『変身物語』〈4. 64.〉］

愛と**飲酒の二つだけは隠すことができない、**とは喜劇作家アンティパネスの古からの見解であった。言葉、表情、仕草、これらすべてが愛と酒を暴露してしまう。しかし、なかでももっともわかりやすい徴は脈拍と表情である。セレウコスの息子アンティコスが義母のストラトニケへの恋の病に罹って、その病の原因たる悲しみを口にしようとはしなかったとき、医者のエラシストラトスは脈拍と表情とから、彼が義母への恋に陥っていることを見出した。「彼女がやってきたり、その名前が呼ばれたりしたら、彼の脈拍は変わり、さらに赤面したから」［プルタルコス〈『対比列伝』「デメトリオス」38.〉］。ポリュクレイトスの息子、カリクレイトスの恋は、まさにこの種のものであった。医者のパナケオスによって見つけだされた彼の病は、アリスタエネトスの物語で、大体を読むことができる［『恋愛書簡集』〈1.〉13.］。ガレノスも、執政官ボエティウスの妻ユスタが役者のピュラデスに惚れたと、同じ徴候から言い立てる。ポリアルコスの脈拍や表情がアルゲニスの名で変わったように［バークリ〈『アルゲニス』〉第1巻］、ピュラデスという名だ

けで、いつもユスタの脈拍も表情もどちらも変わったからである。フランシスコ・デ・バリェスは、『医学哲学論議』（第3巻、第13医学論議）で、そのような**恋の脈拍**といったものがあることや、恋がそんな風にして明らかになることを否定する。しかしアヴィケンナは自分の経験から、ガレノスの恋の脈拍についての見解や、ド・ゴルドンの「愛する女性がすぐそばを通れば、かれらの脈拍は尋常ではなく速い」（〈『医学の百合』〉第20章）という言葉を肯定する（〈『医学典範』〉第3巻第1部〈4. 22.〉）。ランゲ（『医学書簡』第1巻第24書簡）、ナヴィサヌス（第4巻第66項目「婚姻について」）、バラスコン・ドゥ・タラント、グアイネーリオ（第15論攷）、さらにヴェルリオラは「愛する女性の話すのを聞いたときの、脈拍の異変、仕事の放棄、不眠、度重なる溜息、赤面は明確な徴候である」〈『医学観察』〉と、徴候ゆえのこのことを記している。ところで、他の者たちの中では、あのポーランド人ヨーゼフ・シュトルースは、彼の脈拍論の第5巻第17章で、心の中のこれやその他の愛情はすべて脈拍によってわかると考えている。「あれやこれやそのような疑いがあるかどうか」知ろうと思うなら「動脈に触れてみよ」〈『脈拍の術』〉。また彼は、第4巻第14章で「恋は不整脈をもたらす」とこの種の特殊な脈拍について述べ、自分の患者である、ひとりの良家の女性の例を挙げている。この方法で彼女が深く恋に陥っていることを見出し、その相手について、大勢の人の名を挙げていき、懸念される人の名に至ったとき、「彼女の脈拍は変わり、打つ速さを増し始め、彼は何度も脈診して何が問題なのかを突き止めた」。アポロニウスは『アルゴナウティカ』第4巻でイアソンとメデイアの邂逅を韻文で書く際に、お互いを見て赤面させ、はじめは口もきけなくさせている。

――パルメノよ、私も、彼女を
見てしまったからには、全身がわなわなと震えるのです。
［〈テレンティウス〉『宦官』第2幕〈正しくは第1幕〉第2場〈83-84.〉］

タイスを見てパエドリアは身を震わせ、他の者たちは汗をかき、息を切らせ、

脚も膝もがくがくし、――

同じような場合での心臓の動悸に悩まされ、アリスタエネトス［『恋愛書簡集』第7巻2.］が述べているように、「［**じわっと汗をかき、幾度も呼吸困難になり、**］**心臓が口元まで来て**」飛び出しそうで、燃えて凍え（というのも愛は火でもあり、氷でもあって、熱く、冷たく、痒み、熱、狂気、体液過多でもあるではないか）、顔色は蒼くなったり赤くなったりするが、たいてい最初の出会いでは赤面する。ときには、あるいは好きな女性のことが話されるだけでも、スピリトゥスが激しく動揺して鼻血を出す。まさにその徴候を、エウスタティオスはイズメネスの感情についての議論にして、彼女がたまたま想い人に逢ったとき、表情を変えて乙女らしく頬を染めた。これは恋人たちの間では普通のことで、陽気で綺想に溢れた［リジューの］司教アルヌーが、滑

稽なエピグラムで巧く表現している。

彼らの顔は互いに顔を赤らめることで応え、
優し気な恥じらいが互いの感情を露わにしてしまう。
〈『オード集』7. 3-4.〉

しかし、そういったことは彼らが一緒にいるときに現われる徴候からもっともよく露呈する。話し振り、多情な視線、振る舞い、煽情的な仕草が、それを露わにするのであり、彼らは自制できず、接吻し続けるであろう。医者のストラトクレスは、婚姻の日、宴の席にあって、「**乙女に強く三度の接吻をするまでは何も喉を通らなかった**」[『不凋花』]。まず言葉、そして接吻、それから他のたしなみがあり、それから接吻、それから他愛もない質問、それから接吻、それで知力が枯渇したら、もう何も言えないので、接吻も抱擁も止むことはない。

――それは消えることなく、いつも始まる、
［ペトロニウス『不完全詩格詩集』］

けっして終わることなく、次の接吻、また次の接吻、そしてまた次、次……と。

――ここに来なさい、テライラよ――
〈フラカストロ『ナウゲリウス』〉

さあ、私に口づけしておくれ、コリンナよ〈B・ホリディ『テクノガミア』参照〉。

百の百倍の接吻を、
百の千倍の接吻を、
千の千倍の接吻を、
シチリアの海のしぶきほどの
天空の星ほどの、
何千もの接吻を、
私は、その赤く染まった頬に、
その膨らんだ唇に、
その語りかける眼に、
ひっきりなしに押しつけよう、

おお、美しいネアエラよ。

［ヨハネス・セクンドゥス『接吻』7.〈1-11.〉］

カトゥルスがレスビアに語るように

僕に千の接吻をおくれ、次に百の、
さらに千の、もう一度百の、
今度は千の、再びの百の接吻を。
〈カトゥルス『詩集』5. 7-9.〉

――まず、百をおくれ、
それから千を、そしてまた
百を、さらにもっと、……
［我が至上の詩人 B・ジョンスン『エピグラム集』第 119 番〈正しくは『森』6. 8-11.〉、カトゥルスを翻訳、模倣］

あなた方が家畜、草をすべて蓄えるに至るまで、……〈同書 6. 12-13.〉。ウェヌスがアドニスに、ルナがエンデュミオンとおこなったように、彼らは絶えず戯れ、抱きしめる［ヘンシウス〈正しくはヘインシウス「ヤコブス・プリメリウスへ」〉］、数多くの鳩のように。

鳩のように唇を唇に重ねながら、
〈アウルス・ゲッリウス『アッティカの夜』20. 9.〉

しかも、素早く、かつ大胆に、

彼らは身体をぴったりくっつけ、口からの唾きを混ぜ合わせ、
歯を唇に押しつけて、息をはずませる。
［ルクレティウス〈『事物の本性について』〉第 4 巻〈1108-09.〉］

ルキアノス［『娼婦の対話』第 4 巻］において、ランプリアスがタイスに接吻するように、「**かくも強く口を押しつけるので唇を引き離すことがほとんどできず、うなじは反り返る**」。アリスタエネトス［『恋愛書簡集』〈1.〉16.］において、ピリッポスが恋人に接吻するように、「**愛に狂って、かくも激しく密着させるので唇を引き離すことはほとんどできず、私の口をすべて押し潰すほどだ**」。アレティーノ〈『ナンナとアントニアの話』バルト訳『ポルノディダスカルス』〉において、ルクティアは彼女の求愛者からそのような接吻で迎えられ、それは恋する者たちの常だった。

――しばしば歯が唇をもてあそび、
そして接吻を続けながら、強く押しつける。――

私は述べておくが、彼らは自制することができず、手を繋いだり接吻したりするだけではなく、また抱擁し、つま先を踏みあったりし、ピラストラトス〈『書簡集』54.〉が彼の愛人に告白しているように、「**自ら進んで、悦びと共に**」胸を探り合う。そして、ルキアノス［『娼婦の対話』第 4 巻］において、ランプリアスは「**右手をひっそり胸に忍び込ませ、乳首に押しつける**」などし、乳首に触るが、それもときどき、誠実さにはほど遠い。それは、あの喜劇［テレンティウス〈『宦官』563-64.〉］において、老人が自分の息子についてしっかり観察しているとおりで、「**お前が少女の胸にこの手を差し入れるのを、私が見ていなかったであろうか**」。このように次に進んで、そこには多くのこのような愛の術策が伴っている。ルキアノスの『神々の対話』第 3 対話第 3 巻において、ユノはユピテルに向かってイクシオンについて不満を漏らしている。「彼は私のことをきわめて注意深く見て、時折溜息をつき、仲間の前で涙ぐむのでした。そして、私がたまたま飲み干して、ガニュメデスにカップを渡すと、彼は、まさに私が飲んだカップで、しかも私が飲んだのと同じ箇所で飲もうと欲し、そしてカップに口づけし、それから私のことをじっと見つめて、時折溜息をつき、そしてまた微笑むのでした」。もしそうならば、彼らは近づいて戯れることも、話し合うための機会や親交や交際をもつことも、そして共に語ることもできない。だが、彼らが面前にいるならば、彼らの眼が明らかにするだろう。諺が言うように、「**愛があるところに眼がある**」〈ヴァルター編『格言集』32036.〉、すなわち、私が見るところを私は好み、私が好むところを私は愛する。しかし、彼らは、彼女の眼の中で自らを失うだろう。

彼らは互いに顔を見つめ合って、
口には出さないが、「我々の愛がどこにあるのか」と問うていた。
〈オウィディウス『名婦の書簡』3. 11-12.〉

彼らは自らが愛する者から眼を離すことができず、彼らは「**自身の眼によって彼女を妊娠させ**」、自分の眼によって彼女を陵辱し、常に見つめ、顔を盗み見し、微笑み、彼女に一瞥を与えるだろう。それは、アポロンがレウコトエに［オウィディウス『変身物語』4.〈195-97.〉］、ディアナが彼女のエンデュミオンにおこなったことである［ルキアノス〈『著作集』〉第 3 巻〈『神々の対話』11. 1.〉］。ルナはカリア地方でじっと立ち止まり、ラトモス山に自らの馬車を留めさせた。誰もがすべて立ち止まり、讃嘆するに違いない。あるいは、彼女が通りすぎるならば、彼女を見ることができるかぎり、彼女を追っていくに違いない。彼女は、アナクレオンが呼んでいるように〈アテナイオス『食卓の賢人たち』13. 564D.〉、「**魂の馭者**」である。彼らは彼女の戸口や窓を通りすぎることができず、彼女は天然磁石のごとく、彼らの眼を自らへと惹きつける。彼女が眼の前にいなくても、彼はその方向へとぜひとも眼を向けて、そこを振り返るに違いない。アリストタエネトス〈『恋

愛書簡集』2. 2.〉はエクシテモスについて、ルキアノスは『絵画論』〈1.〉において自分自身について同様に語り、そしてタティオスもクレイトポンについて、レウキッペから「**彼は眼をレウキッペから逸らすことはけっしてなかった**」〈『レウキッペとクレイトポン』〉［第4巻］〈1. 4.〉と語っている。そして多くの恋する者たちが告白しているように、自分の想っている人が眼の前に現われたときには、自らの眼を逸らすことができず、彼女のことを、**瞬きすることもなく、**きわめて熱心で貪欲に、しっかりと、じっと見つめることしかできなかった。それはあたかも、彼らがすっかり見ようとしたかのような、あるいは彼女を十分に見ることが叶わなかったかのようである。

――熱心に、凝視し続け、釘付けになる。
〈ウェルギリウス『アエネイス』1. 495. 参照〉

そこで彼女のために同じことをおこない、自分の眼で彼を飲み、否、彼を飲み干し、彼を貪り、彼を飲み込むだろう。それは、マルティアリス〈『エピグラム集』9. 59. 3.〉のマムッラがおこなったことを想い起こさせる。

彼女は柔和な若者たちを眺めて、眼で食い尽くした……。

この点については、ルドヴィコ・ディ・バルテマの『旅行記』〈マグトリガナヌス訳〉、第3巻第5章〈正しくは第2巻第6章〉に愉快な話がある。すなわち、アラビアで、サナスのスルタンの妻が、ルドヴィコが美しく白かったので、彼から眼を離すことができず、太陽が昇ってから沈むまで想いを止めることができず、ある日、彼女は彼を自らの部屋に招き入れた。「**そして、二時間の間、彼女は見つめて、私から視線をけっして逸らすことなく、私をあたかもクピドのごとき者として見ていた**」。ルキアノス［『愛する者たちの対話』〈15-16.〉］の青年は、ウェヌスの絵画に恋に陥り、毎朝、彼女の神殿に詣でて、そこで、太陽が昇ってから沈むまで、一日中過ごしていた。夜になっても家に帰ろうとせず、女神の絵画に向かって座りこみ、ずっと彼女を見上げて、何と言っていたかは知らないが独り言を呟いていた。こうして、もし彼らが自分の愛する人を見ることができないならば、自分が想っている人の戸口のあたりをいつも歩き回り、待ちながら、出会う機会を得ようとするだろう。たとえば、ソフィストのロンゴス〈『ダプニスとクロエ』3. 4-5.〉では、ダプニスとクロエという二人の恋人たちが、互いの戸口をいつまでもうろついていた。ダプニスはクロエと一緒に過ごせる機会を求めて、夏は狩りをし、冬は彼女の父の家の付近で、厳寒の中で鳥を捕ろうとしたが、それは、彼女が彼と出会い、彼が彼女と出会うためだった。アレティーノ〈『ナンナとアントニアの話』バルト訳『ポルノディダスカルス』〉のルクレティアが述べているが、「ある王の宮殿は、私がローマに住んでいたときの家ほど入念には護られていなかった」。この家の屋根つき玄関と通りは、私を見たいという確かな目的のために、歩いたり馬に乗ったりする人々でいつも一杯だった。彼らが通り過ぎるとき、彼らの眼は私の窓に釘付

けで、彼らが通り過ぎたあとも、彼らは私の家を振り返らずにはいられなかった。そして、彼らはときどき、咳払いしたり、溜息をついたり、あるいは、場違いにも大声で話すこともあったが、それは私が窓から外を覗いて彼らを注視するためであった。これは他の場所でも同様であり、これはあらゆる恋人にとって共通することであり、彼の幸福は彼女とともにあって彼女と話すことである、彼は彼女と一緒にいることだけで満足する。そして、「彼女が住んでいる通りを、一日に七度か八度」歩き、「彼女を見るために無駄にさまよう」だろう［〈ピエール・ボエステュオ〉『小世界劇場』第3巻］。どこで、いつ、そしていかにして彼女に出会うかをいつも企んで、

夜ごとに低い囁きを
然るべきときに繰り返す。
［ホラティウス〈『オード集』1. 9. 19-20.〉］

そして、彼が立ち去ると、再び彼女を見るまで、あらゆる一分を一時間と、あらゆる一時間を一日と、十日を一年全体と考える。

もしあなたが月日を数えているならば、我々恋する者は正確にそれを数え上げましょう。
［オウィディウス〈『名婦の書簡』2. 7.〉］

そして、もしあなたが恋に落ちているならば、あなたもまたこう言うことだろう。「**美しい人よ、さようなら、さようなら、最愛のアルゲニスよ、さようなら**」〈ウェルギリウス『牧歌』3. 79. 参照〉。そして、もし彼が彼女と会う約束をしていて、それがすぐのちに、おそらく明日であっても、彼は離れがたく、何度も何度も別れの挨拶をして、それからまた引き返し、振り返って手を振り、遠くから帽子を振り動かす。彼は立ち去ると、再び彼女に会うまでが長く思われ、それは彼女も同じである。時計はたしかに遅れており、その時は過ぎている。

デモポンよ、あなたをロドペーでもてなした、あなたのピュリスは、
約束の時を過ぎてもいらっしゃらないことを嘆いています。
［オウィディウス〈『名婦の書簡』2. 1-2.〉］

女は窓辺で、彼が来ないかとじっと眺めており、そして伝承によれば［ヒュギヌス『神話伝説集』59.］、ピュリスは、彼女のデモポンが帰ってこないかを見るために、その日に海岸に九度も通った。そして、トロイロスはクレシダを探しに市門に何度も通った［チョーサ『トロイラスとクリセイデ』5. 603ff.］。彼女はすぐに安らぐことができず、再び彼を見るまで病気のままで、その間、怒りっぽく不機嫌で、哀れで悲しみに満ち、そして、なぜ彼は来ないのか、どこに彼はいるのか、なぜ彼は約束を破るのか、このように長く遅れるのは、彼が元気ではないからか、彼が不幸に見舞わ

れたのではないか、彼が自分自身と私のことを忘れたのではないか、などというようなことを無限に思う。そして、再び自信を得ると、彼女は立ち上がり、見て、聞き、尋ね、耳を傾け、見まわす、遠くいるあらゆる男が彼だと思い、通りにざわめきがあれば、そこに彼がいるのではないか、それが彼ではないかと思いながら。そして「**曙と太陽を悪しざまに言い、呪う**」。それはこれまでもっとも長い日であり、彼女は不安で心配しながらぶつぶつ言い続ける。というのは、「**愛は遅滞を許さない**」〈セネカ『狂えるヘルクレス』588. 参照〉からである。彼女と一緒にいる時間はたちまち過ぎ去り、彼が彼女の家へ向かうときは、何マイルでも短く、道のりは楽しく、天候が暑くても寒くても、脳天まで歯ががちがちといいそうでも、すべては良好である。暑くても寒くても、彼はたじろがず、どちらにしても同じであり、もし肌が濡れていても、彼はそれを感じず、少しもそれに気遣うことなく、易々とそれとそれ以上のことに耐えるだろう。というのは、それは迅速におこなわれるからである。そして、恋人のために、荷物はけっして重くならず、愛はそれを軽くするからである。ヤコブはラケルに七年間仕えたが［『創世記』29. 20.］、彼が彼女を愛していたがゆえにそれもすぐに終わった。もし彼が彼女と一緒にいる幸福を享受しているならば、これほど楽しいことなく、彼はひとときの間、天上にいる気分である。一方、もし彼が享受していなければ、たちまち落胆して、孤独で、沈黙し、そして、泣き、嘆き、溜息をつき、嘆きながら立ち去る。

しかし、恋人たちの心の徴候はほとんど無限であり、きわめて多様なので、いかなる学芸もそれを把握することはできない。彼らはときどき愉快で、歓喜のあまり我を忘れてしまうが、しかし大部分で、愛は災厄、責め苦、地獄であり、結局、苦く甘い情念である。「**愛は蜂蜜と胆汁で満ち満ちており、甘い味と苦い味を与える**」。それは、「**甘美な苦さ、心地良い苦痛、陽気な責め苦であり**」、

そして私を蜂蜜よりも甘いもので喜ばせ、
そして私を胆汁よりも苦いもので苦しめる、
［プラウトゥス『小箱の話』〈69-70.〉］

夏虫のように、あるいはスフィンクスの翼のように、あるいはすべての色をもつ虹のように、

太陽の光を浴びて、黄金色に、
雲を背にして青色に、虹の輝きのように変化し、
［ストバイオス〈『説教』62.〉］

美しく、汚く、そして変化に満ちているが、大部分は面倒で不快である。というのは、一言でいえば、それは、スペインの異端審問も比類できないほどの拷問と迫害［プラウトゥス〈『小箱の話』203.〉］であり、かの詩人においてそう呼ばれているように、消すことのできない炎、そして何

かそのようなものである。アウグスティヌスが述べているように、それから生じるのは、「深い不安、動揺、情念、悲哀、恐怖、疑惑、不満、争論、不和、闘争、背信、敵意、追従、詐欺、騒動、欲望、厚顔、残虐、不正などである」[『神の国』第 22 巻第 22 章]。

――苦痛、不満、
悲嘆、常なる涙、
疲労、苦悩、痛恨、
あるいは、さらに悲しいものでありうるもの、
これらを、人生の伴侶であるネアエラよ、お前が与える。
［マルルス〈『エピグラム集』「ネアエラへ」6-10.〉］

これらが恋人たちに伴うものであり、どの詩人も繰り返すように、一般的な徴候である。

疑心、敵意、無謀、
戦争、はたまた平和も、等々
これら悪徳が愛には存在する。
［テレンティウス『宦官』59-61.］

悪夢、苦行、彷徨、恐怖、逃避、
浅慮、愚昧、不節制、
多情、強欲、悪意が、
なお根づく。欲望、怠惰、不正、
貧困、憤慨、浪費、等々が。
［プラウトゥス『商人』〈25, 27-30.〉］

詩人は誰でも、そのような愛の症状のカタログで満ちているが、なかでも恐怖や悲嘆が当然のこととして主たる位置を要求している。エルコレ・サッソーニアは『憂鬱症論』第 3 章〈正しくは第 2 章〉で、恐怖を愛から除外しているが、私はそうではないと認めている。「愛は激しく掻き立てられた恐怖に溢れたものである」[オウィディウス〈『名婦の書簡』1. 12.〉]。愛は恐怖、憂慮、懐疑、心配、偏狭、疑心で一杯、愛は男を女に変え、ヘシオドスをもそのようにさせ、恐怖と怯懦をウェヌスの娘とした。

盾も甲冑も断ち割るマルスに、
典雅なウェヌスは怯懦と恐怖とをともに産み出した。
〈『神統記』933-34.〉

というのも恐怖と愛とはいつも一つに繋がっているのだから。さらに両者とも簡単に過ちを犯し、膨れ上がり、ときにはすぐに真に受け、希望と自信に溢れ、そしてまたとても妬み深く、いかなる良い報せも信じたり受け容れたりしない傾向がある。喜劇詩人〈テレンティウス〉が、優しい父親と病身の愛し子、ミキオとアエスキヌスの対話において、この一節をとりわけ美しく描き出した［『アデルフォ（兄弟）』第4幕第5場〈696-98.〉］。「ミキオ：元気でいておくれ息子よ、彼女を妻として迎えなさい。アエスキネス：ああ、お父さん、からかっておられるのですか。ミキオ：お前をからかってるのかって。どうしてだ。アエスキヌス：私がとても心から望むものを、私はそれだけいっそう疑い怖れるからです。ミキオ：家に戻って、彼女をお前の妻として迎えにやりなさい。アエスキヌス：今妻だなんて、何なのですか。今だなんてお父さん、……。」こういった疑念、心配、疑心は彼らの苦しみのほんの些細な部分で、多くの場合、感情から行動へと突発して、まことしやかに話し、口論になり、そのうちひどく媚びていそいそと追従を言い、次第にそういった疑念などは嫌悪、口論、争い、誓い、喧嘩、哄笑、悲涙などとなる。発作的にそうなるのではない人は、愛の磁石に完全に触れたわけではない、とルキアノスは考えている［〈『著作集』〉第4巻『娼婦の対話』〈8.〉］。恋する者たちの行動と感情とはこのように入り混じっているが、今述べた以外の感情のうち悲しみが大きな場を占めている。愛は多くの者にとってそれ自体苦しみで［アリストテレス『弁論術』第2巻〈第4章〉、オウィディウス〈『愛の治療法』227-28.〉参照］、プラトンは「苦きもの」、苦悩、不幸と呼ぶ〈おそらく『ティマイオス』42A.〉。

この苦悩と厄災を私から奪い去ってくれ。
それは底の底から這い寄り、四肢を麻痺させ、
胸全体から歓びを取り去ってしまった。
〈カトゥルス、76. 20-22.〉

パエドリアは、次のように叫んだとき、真にこの感触を醸していた、

おお、タイスよ、願わくば
君のところにも僕と同じような愛があり、
そして僕を苦しめているものが、同じく君をも苦しめることになるように。
［テレンティウス『宦官』第1幕第2場〈91-93.〉］

かの若者はそんな苦しみを抱いていたのだ、満たされなさに再び吼えたてたとき、

私は放り出され、苦しめられ、悩まされ、心乱され、
愛の車輪で悲惨にも転がされ、

息を奪われ、運び去られ、引きずられ、連れ去られる、
私がいる処に私はいず、私がいない処に魂はいる。
［プラウトゥス〈『小箱の話』207-11.〉］

ルキアノスでのディアナはウェヌスに、「**私はほとんどアモルゆえに死にそうだ**」と、思いを打ち明けた。そして長々と語ったのち、突然話すのをやめて泣いた、「ああウェヌス、私の惨めな気持ちが解るでしょう」〈『著作集』第 3 巻 10『神々の対話』11「ウェヌスとディアナ」〉と。ルキアノスにおけるカルミデスはあまりに我慢できなくなってすすり泣き溜息をつき、髪を引き抜き、首を吊ってしまいたいと言った。「私はもうお終いだ、おお妹トゥリペナよ、この愛の苦しみに私は耐えられない、どうすればいいのか」［〈『著作集』〉第 4 巻『娼婦の対話』〈11.〉］。「**おお、災いを福に転じる神々よ、私を心煩いから解放したまえ**」［『恋愛書簡集』第 2 巻第 8 書簡］、悲惨からも、魂の苦悩からも、とアリスタエネトスのテオクレスは祈る。恋する者たちの人生の大部分は苦悩、不安、恐怖、悲しみ、歎き、溜息、疑念、そして心煩いに満ち、（ヘイホー、私の心も悲嘆）沈黙、いらだたしいほどの孤独で一杯のものと言おうか。

彼は、たびたび蔭なす東屋を、心満たされぬまま訪れ
空中へと稔りなき叫びを発することだろう。

晴朗なる休止や心地よい風、あるいは、愛する女性が微笑みかけてくれたり、優しい表情や接吻をくれたり、また彼の奉仕が受け入れられたとの嬉しい報せが来たりとかいった突然の変化があったりした場合は別だが。

そういうときには、恋する者は、まるで春に郭公より早くナイチンゲールを聞いたとか、カリストがメリボエアの面前にいたとでもいうかのように、自信満々になり、有頂天になっている。「**いったい誰が、この死すべき生において――私には人間性を超えていると思われる――かくも輝かしい身体を見たであろうか**」［〈ロハス〉『セレスティーナ』〈バルト訳『ポルノボスコディダスカルス』〉第 1 幕］。これ以上の歓びは神から与えられえず、人が求めたり味わったり望んだりできない。彼の幸せに比べうる幸はなく、この歓びに匹敵するものなく、愛に比肩する生なく、彼は天国にいるのである。

誰が私よりも幸せに生きているだろうか。あるいは、この生よりも
望ましいものがあると、誰が言いうるだろうか。
［カトゥルス『レスビアの歌』〈107. 7-8.〉］

恋する者は、このようなとき王侯とすら運命を交換しようとは思わない。

私はあなたに受け容れられている限り、
ペルシアの王より至福の至りだった。
［ホラティウス『オード集』第3巻9.〈1. 4.〉］

ペルシアの王たちも彼ほどには陽気ではなかった。「おお、人には愉しい日だ」［テレンティウス『宦官』第3幕第5場〈560.〉］とケレアは恋人パンピラの処から帰ってくるとき大喜びで叫び、

今や、ほんとうに、私は死ぬことも耐えることができる。
この歓びを、苦悩に満ちた生が汚すことはないのだから。
［『宦官』第3幕第5場〈551-52.〉］

そのすぐあとで、彼は嬉々として同じような場面に置かれたので、我慢できなかった。

おお、同郷の衆よ、一体全体、今日、私より倖せに生きている者はいるのか。
誰もいやしない、神々がその力をすべて、私に
明らかに示されたのだから。
［同書　第5幕第9場〈1031-33.〉］

しかしこの若い優男はしだいに相手の娘に苦しみ、悲嘆にくれ、泣き叫び、次のように吼えたのだった。

私はお終いだ――

娘は何処にもいない、私も何処にもいない、私は彼女を見失ってしまったのだから
私は何処に求め、何処を捜せばいいのか、誰に尋ね、どの道へと足を向ければいいのか。
〈同書　292-94.〉

私はどうなってしまうのだろう。

――彼は意に染まぬながら生命の息を呼吸していた。
［マントヴァのバティスタ『牧歌』］

彼は生に倦み、病み、狂い、絶望していた。「**今、そこに身を投げられるようなものが、ここにあればいいのに。**」［テレンティウス『アデルフォ（兄弟）』3. 4.〈正しくは『アンドロス島の女たち』1. 606.〉。これはカエレア〈正しくはダウォス〉の場合のみならず、この人にもかの人にも、

同じような状況の恋する者たちのものである。もし、悪い報せを耳にしたり、求愛に失敗したり、彼女がそっぽを向いたり、彼の面前で他の男に彼より敬意を払ったり、（カプレットが言うように）「他の求愛者により好意を示し、その人により親密に話しかけ、その者より親切に扱うなら、もし頷きや微笑みやメモで彼女が気持ちを他の人に見せたりするならば、彼はすぐさま苦悩し」［『愛の蔑視』第１巻］、誰もこれほど落ち込むことはないほど、完全に痛手を受け、零落者となる。「**その者に向かって、運命は、憎悪のもっとも冷酷なありとあらゆる槍を放つ**」［〈ロハス〉『セレスティーナ』〈バルト訳『ポルノボスコディダスカルス』〉］。死者のごとくなり、運命の軽蔑、運命の怪物、無より悪く、王国の壊滅すらこれよりましといった具合。アレティーノでのルクレティアが、自分について語って、このことについての良い証しとなっている。「というのも、私が何人かの求愛者たちに私が修道院に入ると信じさせたとき、彼らは父母を失くしたかのように悲嘆にくれました。その後未来永劫、私と相まみえることはなかろうという状況だったからです」［〈『ナンナとアントニオの対話』〉バルト訳『ポルノディダスカルス』］。**いかなる苦労も軽いものだった**［テレンティウス『自虐者』〈399.〉］。でも、これだけは耐えられなかった。

あなたがいなかったということは――

［『自虐者』〈400.〉］

「なぜって、あなたと一緒でなければ、私は存在できないのだから」。嘆きのアミンタス、苦悩のアミンタス、憂い多きアミンタス、大都市が略奪される方がまし、王の軍隊が打ち負かされる方が、無敵艦隊が沈む方が、二万の王が滅する方がまし、彼女の指一本が痛むよりは。それほどに彼らは彼女の利を熱望し、気遣う。ルクレティアが追認しているように、彼らはみな私のために修道士になろうとする。それによって私に会い、個人付き聴罪師として、あるいはストゥールボールやバーリブレイクで、もう一度私にまみえようとしてであるが、あとでしつこい求愛者がやってきたとき、「暇がないとか、家にいないとか、多忙である、彼と話すことはできないなど小間使いに言わせたなら、彼はたちまち仰天し、大理石柱のごとく立ち尽くし、ある者は誓ったり、苛立って当たったり、罵ったり、怒りで泡を吹いたりするようになった」〈アレティーノ『ナンナとアントニオの対話』バルト訳『ポルノディダスカルス』〉。

その声そのものが、彼にとって、雷鳴を放つときのユピテルの怒りよりも
狂暴である……

［マントヴァのバティスタ〈『牧歌』1. 101-02.〉］

マンドレイクの声もその声にまさる甘美な調べではあるが、「私がもてなした彼は、狂喜に陶酔し恍惚として桃源郷にいた」。このことは恋する者すべての一般的な気分であり、彼女は彼らの厳格な道しるべの北極星である。

魂の歓喜も、その蝕も。

［リーチ〈『重要なムーサ』「その炎」1. 24.〉］

輝いているときの太陽に対するチューリップ（われらが薬草医たちはそれをナルキッソスと呼ぶ）は、**太陽の光に向かって花を広げる素晴らしい花**だが、太陽が沈んだり、嵐がきたりすると、花を隠し、萎れてしまい、そこには何の歓びも残らないように、（これをマントヴァ公カルロ・ゴンザーガが、愛する者たちと同様の意味で、しばしばインプレ―ザに用いたのだが）それを恋する者たちは誰もが自分の愛する女性に対してそうなる。彼女は彼らの太陽、**原動力**すなわち**形相を付与する魂**、これが、あるインプレーザでは、風で絶えず動き続け、自分自身では微塵も動かない風車として、優美に表現された［〈ヘインシウス〉『愛のエンブレム』33.〈2. 9. Sig. 500v-02r.〉］。

もしあなたの好意が息吹かれなければ、私は不具のままだろう。

〈同書　Sig. 104v.〉

彼は彼女の息吹で生命を与えられ、彼の魂は彼女の肉体の中で生き、**彼女だけが破滅と健全との鍵を握っている**［〈ロハス『セレスティーナ』バルト訳『ポルノボスコディダスカルス』〉「メリバエについてのカリスト」］。彼女の好意次第で彼の運命の潮は退いたり満ちたりし、彼女の相好の好悪によって彼の状況は上下する。

私の心は輝く、ルキアよ、あなたの光で。

彼の現在の状態が悦ばしいものであろうと不快なものであろうと、それは彼が愛するかぎり続き、彼は何もすることができず、彼女以外に何も考えることができない。欲望は休むことなく、彼女は彼の北極星、明けの明星、宵の明星、彼の女神、彼の女主人、彼の生命、彼の魂〈エラスムス『対話集』「豚どもと少女たち」〉、彼のすべてで、眠っていても目覚めていても、彼女のことが常に彼の口からほとばしる。彼の心臓、両眼、両耳、そして彼の思考のすべてが彼女で満ちている。彼のラウラ、彼のヴィクトリナ、彼のコルンビナ、彼のフラヴィア、フラミニア、カエリア、デリアあるいはイザベラで、（あなたが彼女のことをどのように呼ぼうとも）彼女は彼の五感の唯一の対象、彼の魂の実質、「**彼の魂の巣**」で、彼は彼女を際限なく誉め讃え、「**全身が彼女の中にあり**」、彼女で満ちており、彼女を呼吸することもできない。恋に病むカリストが語るには、「私はメリベアを崇め、メリベアを信じ、私はわがメリベアを尊敬し、驚嘆し、愛する」［〈ロハス〉『セレスティーナ』〈バルト訳『ポルノボスコディダスカルス』〉第１幕］。彼の魂は彼の想い人に夢中になり、恍惚となり、囚われた。タイスがパエドリアに暇乞いしたとき、

――私のパエドリア、他に何か用事がある？

［テレンティウス『宦官』第1幕第2場〈190-91.〉］

（彼女は言った）ねえあなた、他に何か用事を、私に頼まれるのかしら？　彼はただちに答えて、こう用事を伝えた。

――僕が用事だって？
昼も夜も僕を愛してくれ、僕を欲してくれ。
僕を夢に見てくれ、僕を待っていてくれ、僕のことを考えていてくれ。
僕を望んでくれ、僕を喜ばせてくれ、僕にとってすべてであってくれ。
つまるところ、僕は君の心なのだから、君は僕の心であってくれ。

［同書〈192-96.〉］

しかし、これがすべて必要というわけではない、とあなたは言うだろう、もし彼女がひとたび愛するならば、彼女は彼のものになり、彼に、彼一人に自らの愛を定めるだろうと。

――互いに遠く離れていても
彼の声を聴き、彼の姿を見る。――

［ウェルギリウス『アエネイス』4.〈83.〉］

彼女〈ディド〉は彼のことだけを不断に思い、夢見ることしかできず、またそうに違いない、オルペウスが彼のエウリュディケに対してそうであったように。

愛しい妻よ、おまえを、寂しい岸辺でただ一人、
日が昇るときもおまえを、日が沈むときもおまえを歌っていた。

〈ウェルギリウス『農耕詩』4. 465-66.〉

そして、ディドが彼女のアエネアスに対してそうであったように。

――そして、いかなる夢が私をおののかせるのか。
勇士の武勇がしばしば、その姿が頻繁に想い浮かぶ。

〈ウェルギリウス『アエネイス』4. 9; 4. 3.〉

クレイトポンはアキレウス・タティオス〈『レウキッペとクレイトポン』〉第1巻〈6.〉において、いかに彼の女主人のレウキッペが昼間よりも夜間にはるかに酷く彼を苛んだのかについて不満を

述べている。「というのは、昼間は、彼は自らの五感を逸らすための何らかの対象を所有しているが、夜間にはすべてが彼女に向けられるからである。夜の間中、彼は目覚めており［テレンティウス〈『自虐者』491.〉］、彼女以外に何も考えることができず、自らの心から彼女を追い出すことができなかった。朝方になって、眠りが彼に少しの憐れみをかけ、彼は少しの間まどろんだが、しかし彼の夢はすべて彼女についてのものだった。

――暗い夜、あなたに
私は話しかけ、抱擁し、そして夢の偽りの姿において、
消えゆく喜悦が、私の不安な心をなでる。
［ブキャナン『シルウァエ』3. 10-12.］

これと同じ不満をエウリアルスは彼のルクレティアについて述べている。「昼も夜も、私はあなたのことを思い、あなたを望み、あなたについて語り、あなたを呼び、あなたを探し、あなたに期待し、あなたを存分に愉しみ、昼も夜も、私はあなたを愛する」［エネア・シルヴィオ〈・ピッコローミニ『書簡集』114.〉］

私の愛の言葉は止まない、
金星が昇るときも、
それが速い太陽の前に消えるときも。
［ホラティウス〈『オード集』〉第2巻第9オード。］

朝も夕べも、私にとってはすべてが同じで、私の想いが休むことはない。

目覚めているときはあなたを眼で、夜はあなたを精神によって探し求める。
［ペトロニウス〈『サテュリコン』〉］

常に私はあなたのことを考えている。「**魂はそれが生きているところではなく、それが愛しているところにある**」〈エラスムス『対話集』「求婚者と乙女」〉。私はあなたの中で生き、息をする。私はあなたを希う。

おお、あなたを私に戻すことができる、白々とした暁よ、
おお、私には三重の、四重の幸福な昼よ。
［ティブルス『詩集』第3巻第3エレゲイア〈25-26.〉］

おお、あなたを私に再び見させてくれる幸福な昼よ。その間、彼は彼女に夢中になり、彼女の美

しい眼、振る舞い、仕草、手、足、言葉、長さ、幅、高さ、厚み、そして彼女の残りの寸法が、想念のアストロラーベによって詳しく吟味され、計測され、書き留められ、しかも、その想像力はしばしばとても激しく、熱烈で、強引で、また執拗で、きわめて強力なので、しまいに彼は、彼が見ている彼女を実物と考え、彼女に話しかけ、彼女を抱こうとする。それは、彼〈ルキアノス『神々の対話』6.〉が述べているように、「**雲をユノとして**」抱いたイクシオンに似ている。「**僕はレウキッペしか眼に入らない。レウキッペは私の眼と心にいつまでも留まる**」〈アキレウス・タティオス『レウキッペとクレイトポン』1. 9.〉。私はレウキッペしか見ないし、考えない。彼女がいようといまいと、すべては同じことだ。

そして、美しい形姿が消え去っても、
その形姿が喚起した愛は留まっていた。
［オウィディウス『祭暦』2. 775〈正しくは777-78.〉］

彼女の美しさの印象は彼の心の中に常に刻まれている。

彼女の面立ちは彼の胸に刻み込まれ離れない。
［ウェリギリウス『アエネイス』4.〈4.〉］

狂犬に咬まれた人が自分の見るものすべてを犬と考え、肉の中に犬を、皿の中に犬を、飲み物の中に犬を考えるように、彼の想い人は彼の眼、耳、心の中に、彼の五感すべての中に存在する。ヴェルリオラ〈『医学典範』2. 7.〉は自分の患者として、同じ状態にある商人を診た。そして、ウルリクス・モリトル［『〈ラミア的、〉ピュトン的女性について』は、アウグスティヌスに基づいて、一人の男について語っている。この男は、猛烈な愛の情熱のゆえに、彼の想い人が自分と一緒にいるのを見ており、彼女が彼に話しかけ、いつも彼を抱いている彼女と「**眠りもせずに、彼女と同衾していると思われる**」と常に考えていた。

さて、この愛の情熱がこのような結果を産みだすならば、そして悦ばしく意図されているならば、それは通例、恐れ、不断の悲哀、疑念、心配、苦悩を常に伴っているのだから、そこにはいかに辛い責め苦がもたらされ、いかに耐えられない苦痛が存在するのであろうか［シリウス・イタリクス『カルタゴ戦役』15.〈94-95.〉］。

――ガルガラの厳しい頂ほどの、
ひどく縺れた不安を、
長い鎖によって胸に繋ぎ留め、
また、無慈悲な愛は、
心に深く、傷を負わせる。

バビロニアの王が自分の従者を、王家の血を引く、自らの境遇を超えた若い淑女に恋したという理由で罰しようとしたとき、その場に居合わせたアポロニオスは、その従者を解放するように王を説得した。「というのは、恋をして充たされないことは、言葉にできないもっとも辛い責め苦であり」、いかなる僭主も同様な罰を考えつくことができなかったからである。蝋燭のそばのブユのように、彼が近くに寄れば、自分自身を焼き尽くすであろう［〈ピロストラトス〉『アポロニオスの生涯』〈1. 36.〉］。というのは、愛は永劫の「**消耗させる病、魂の苦悶**」［アウソニウス〈『エピグラム集』〉第 35 章］、戦争状態、「**愛する者はすべて戦士**」〈オウィディウス『恋の歌』1. 9. 1.〉で、愛は常に耐えがたい傷で、そして、愛する者の心はクピドの箙、燃えあがる炎〈ウェルギリウス『アエネイス』4. 2、『牧歌』3. 26.〉、「**この火に近づくもの**」［テレンティウス『宦官』〈85.〉］、消えることのない炎だからである。

――病は重くなり、悪化するばかりで、
エトナ山の火口の炎のごとく
わが心の奥底を燃やす。
［セネカ『ヒッポリュトス（パエドラ）』〈101-03.〉］

エトナ山が荒れ狂うように、否、エトナ山や他の物質的な火にも増して、愛は荒れ狂う。

――というのは、愛はしばしば、リパラ島のウルカヌスよりも
激しい炎によって燃やすのが常なのだから。
［テオクリトス『エイデュリア』2.〈133-34.〉］

ウルカヌスの炎はこの愛に比べれば煙でしかない。というのは、クセノポン〈『キュロスの教育』5. 1. 16.〉が述べているように、火はその近くにあるもの、あるいは触れるものだけを燃やすが、この愛の火は、遠くのものまで燃やして焦がし、いかなる物質的な火よりも熱く、強烈だからである。「**火は火の中で荒れ狂う**」［ノンニウス］。これは火の中の火であり、火の精髄である。というのは、カリストの主張するところでは、ネロがローマを焼いたとき、家屋に火を放ち、人々の身体と家財を焼き払ったが、この愛の火は魂自体を滅ぼすのであり、「そして、一つの魂は十万の身体に匹敵する」からである〈ロハス『セレスティーナ』バルト訳『ポルノボスコディダスカルス』第 1 幕〉。いかなる水もこの狂暴な火を消すことはできない。

――彼は胸の内に眼に見えぬ火を飲み込んだ。
この火は水によって消すことができず、雨によって
も、草木によっても、魔法の呪文によっても無くすることができなかった。

［マントヴァのバティスタ『牧歌』2「フォルトゥナトゥス（幸せな男）」〈104-06.〉］

もし涙と溜息がなかったならば、それゆえに少しの安らぎも見いだすことはできないだろう。

かくも白く輝く首が、かくも髪をあげた額が、
愛しいネアエラよ、かくもおまえの眼が、
かくも辰砂に似た頬が、私の心を燃え上がらせるので、
もし、止まらぬ涙が私を鎮めなければ、
私のすべては、細かな灰になるだろう。
［マルルス『エピグラム集』第 1 巻〈「ネエアラへ」ll.1-3, 5-6.〉］

この火は稲妻のように襲い、それゆえ、古のギリシア人は彼らの神殿の多くに、両手にユピテルの雷電をもつクピドを描いた［〈カルターリ〉『神々の像』］。というのは、この愛は傷つけるが、いかにして、どこから来て、どこを射貫いたのかは知ることができないからである。

われわれは身を焦がし、われわれの胸は眼に見えない傷を負っている。
［オウィディウス〈『名婦の書簡』4. 20.〉］

そして、その傷は最初、ほとんど見分けることができない。

――炎が柔らかな髄を蝕み、
物言わぬ傷が狂おしい胸の下で生きている。
［〈ウェルギリウス〉『アエネイス』4.〈66-67.〉］

しかし、次第に荒れ狂い始め、激しく燃え盛る。

――狂おしい胸を炎が、
愛が焼き焦がし、内部で荒れ狂って
奥底の髄を貪ります。そして血管を通って進み、
五臓を火で充たし、血管に潜みます。
梁の先端に、炎がすばやく駆け昇るように。
［セネカ〈『ヒッポリュトス（パエドラ）』640-44.〉］

アブラーム・ホセマンは〈『真なる結婚生活の真なる堅固さ』〉第 1 巻「結婚愛」第 2 章、〈コルンマン『死すべき者たちの奇跡について』1610 年版〉22 頁〈4. 83. Sig. H3r.〉で、プラトンから

引いて、哲学者エンペドクレスが愛ゆえに死んだ人の解剖に立ち会ったのがどんな風であったかを語っている。「彼の心臓は焼け焦げ、肝臓は煤け、肺は干からびていた、自分の魂が、愛の火の激熱で煮られ焼かれたと、彼自身が信じこんでいるように」。これゆえ、同様にある当代の愛のエンブレム作家〈ヘインシウス〉は、愛の激情を、火にかけられた鍋と燃える石炭に空気を吹きこむクピドとによって表現した。火が水を焼き尽くすように、

そのように盲目の愛は彼の内奥を焼き尽くす。

［『愛のエンブレム集』4. & 5.］

かくして愛は完全に干上がらせてしまう。また別のエンブレムは愛を、火の傍に立って融ける松明に喩える。

自分の想う乙女に近づけば近づくほど、
その人は、愚かにも自分の破滅に近づいている。

［〈『愛のエンブレム集』〉8. グロティウス〈実際には言及されず〉］

ゆえに真実を言えば、カスティリオーネが述べているように、「愛の始め、中ほど、終わりは、ただただ悲しみ、苛立ち、苦悩、苦痛、煩悶、倦怠のみで、その結果、むさくるしく、醜悪で、惨めで、孤独で、満たされず、意気消沈し、死を望み、嘆き、気難しくなるのは、恋患いの人の必須の徴候、よくある行動である」［〈『宮廷人』〉第4巻］。このうち続く苦痛や苦悩は、恋する者があまりにそれに囚われると、わがものにすることへの疑心や絶望、あるいは切望して執着することで、自分を忘れさせ、いつも為していることも疎かにさせる。

――事業は中断されたままになる、威圧する巨大な
城壁も、天にも匹敵する高さの機械仕掛けも。

［ウェルギリウス『アエネイス』4.〈88-89.〉］

恋患いに陥ったディドは、仕事を終えぬままにし、パエドラもそうだった。

――パラスの織機も虚しく
織り糸は両の手から滑り落ちてゆく。

［セネカ『ヒッポリュトス（パエドラ）』第1幕〈103-04.〉］

マントヴァのバティスタでのファウストは何をしても愉しめなかった、

いかなる休息も私には甘美ではなかったし、いかなる労働も病める
胸には甘美ではなかった。感覚は働かず、心はすっかり麻痺し、
歌う情熱も死滅した――。

［『牧歌』1.〈「ファウスト」11-15, 18.〉］

自分の風采や財産に無関心になるというのが恋する者たちの気質であるが、テオクリトスでの羊飼いのように「**その髭は整えられないまま、髪はボサボサのまま**」［『牧歌』14.〈4.〉］、もはや身なりや務めを気遣うこともなく、自分の言葉にも意を用いず、先へ先へと進むしかない。

羊の群れも、田舎の家畜たちもすっかり忘れ、
胸を焦がし、夜ごと嘆いて辛さに耐える。

［マントヴァのバティスタ『牧歌』2〈「フォルトゥナトゥス（幸せな男）」107-08.〉、
オウィディウス『変身物語』13.〈763-64.〉］

恋患いのカエレアがパンピリアの家から出てきたとき、しかも思ったほどには歓待されなかったとあっては、ほとんど死人のようだった［テレンティウス『宦官』〈304ff.〉］。パルメノは彼に出会って「**どうしてそう悲しんでるんだ、何処から来たのだ、**どうしたのだ」と尋ねたが、「**誓って僕は、どこから来たのかも、どこに行こうとしてるのかもわからない、そう、自分に関わることをすっかり忘れてしまったのです。**何をしようとしてるのかも、何かをしようとしてるのかどうかも」と悲しみに沈んで答えた。「どうしてそうなったのか」とパルメノ、「恋してるからです」とカエレア。

――先が見えて解っているのに、見えているのに、
生きながら破滅に向かっている。どうすればいいのか解らないのです。

［テレンティウス『宦官』〈72-73.〉］

リーヴェン・レメンスが書簡のなかで、この燃える熱情について描写しているのに拠れば、「最初は自由な思考をし、勤勉な学生のごとく、かの心愉しき哲学の教えのうちに時を過ごしていた者、太陽や月とともに世界を巡り、星々とともに彷徨い、自然の秘密や神秘をくまなく探求し尽くした者が、恋に落ちたゆえに、愛の事々しか考えられなくなり、昼も夜もいかにすれば愛する女性を喜ばすことができるかを書き綴り、研究はと言えば、彼女に自分を認めてもらうこと、彼女の好意を得ること、思いを遂げること、彼女の下僕と思ってもらうことのみである」［『書簡集』56.］。同時代での偉大な学者、

知られうるもの全てが開き示された唯一の人

［アベラール墓碑銘より］

ピエール・アベラールは、エロイーズに恋したとき、学派の学校や学友を訪ねたり訪れたりする気にはならなかった。このことを彼は、「**学派の学校に赴いたり、留まったりすることは大儀であった**」［「第１書簡」］と明かしている。彼の心は新たな恋人のことで一杯だったのである。

そこで、そのため、この目的のためには、もし、自分の動機を要求するという思いを遂げられる望みがあるならば、恋する男は、愛する女性のために、自分自身も、所有物も財産も注ぐだろう、たとえ友達をみな失い遠ざけてしまうことになっても、脅されても、うち棄てられても、相続権を失っても、である。というのも、詩人［ボエティウス］が言っているように、「**愛に対しては誰も法を付与できぬ**」［『哲学の慰め』第３部最終歌〈12. 47-48.〉］からである。この詩人とて愛によって完膚なきまでに落ちぶれ、面目を失くし、乞食をして歩いたとしても、愛する女性のため、彼女を喜ばすために、喜んで物乞いをし、もてるものすべて、財産、土地、恥も醜聞も、名声も、生命すらをも賭けたであろう。

夜も昼も、私は退き下がりも休息もしない、
彼女か死かどちらかを探し見出すまでは。
〈プラウトゥス『商人』862-63.〉

アリスタエネトスでのパルテニスは同様のことをしようと堅く決心していた。「もっといいお相手がいるかもしれませんわ、でも恥などとはお別れ、名誉ともお別れ、誠実さともお別れ、友も富もお別れ……、ああハルペドナ、私の助言を守ってちょうだい、私は愛しいお方のために何もかも手放すわ。あの方を私のものにしたいの、もう何も言わないで、世間に逆らって、私は決めたの、あの方を私のものにすると」［『恋愛書簡集』第６巻〈2. 5. ハルペドナはバートンの創作〉］。船長ガブリアスは、美しい囚われ人ロダンテを見出したとき、将軍ミュスティルスの前に跪き、涙を流して誓い、できる限りの言葉の技を尽くして、それまでに受けた傷とか、果たしてきた任務とか、その他なんでも彼に有利なことによって、**彼の勇敢さの勝利品として、**捕虜の娘を妻にさせてほしいと、総督に懇願した。さらに「私はロダンテを妻にすること以外、何も求めはしません、戦利品も何も一切」と、受け取るはずの支払いも、然るべきすべての報酬も要らないと言ったのだった［テオドレ・プロドロムス『恋の歌』第３巻］。そして正当な仕方で彼女を手に入れられないとなって、その望みを達成するために、彼は背信、暴力、非道に走り、ついには生命を危機にさらした。これは恋する者たちが深く冒される共通の気質、一般的な情念、それを、カスティリオーネの論攷のなかの宮廷人アレティーノにエミリアが語った、「アレティーノ、もし本当にあなたがそうじゃなかったなら、あなたは恋してはいなかった、正直に告白なさい。なぜって、もし、あなたが完全に恋に落ちていたなら、あなたは、その女性を喜ばせること以上のことは何も欲しなかったでしょうから。というのも、それが愛の法、同じものを望み、望まないとい

うことが」［『宮廷人』第2巻］、

彼女が望み望まぬだけを望み望まぬこと。

［ストロッツィ『エピグラム集』］

疑念の余地なく、恋する者たちすべてについて明言されるのは、彼らはまさに奴隷、その時を求めてあくせくする輩、狂人、馬鹿者、阿呆、**黒胆汁病み**［ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデ『頭脳の病』］、呆け者、そして甲虫のごとき盲。耄碌は非常に顕著で［カルダーノ『知恵について』第2巻］、「**愛すると同時に分別をもつことは、**ユピテルにすら可能ではない」とセネカは考えている。どんなに落ち着いて、思慮深く、厳粛で、寛大で賢明、さらに自分を律することのできる人でも、一旦この愛の熱情に囚われてしまえば、彼らの厳粛な人格に似つかわしくない多くの愚行、無作法を為してしまう。

恋に落ちた者は誰も奴隷と化し、虜となって恋する者の道を辿り、
頸木を従順に首につける。

［マントヴァのバティスタ〈『牧歌』1. 114-15.〉］

サムソン、ダビデ、ソロモン、ヘラクレス、ソクラテスなどは、この点における無分別さに当然のことながら苦しんでいる。彼らはハヤブサとノスリの中間種で、自分の阿呆さも弱さも気づき認識していながら、それに抗することができない。ウェルギリウスのディドの諫めと告白がよく証しているように。

彼女は話し始めたが、話す途中で止めた。

［『アエネイス』4.〈76.〉］

セネカのパエドラも、

理性が求めるものを、愛の狂気が打ち負かし支配します。
力ある愛神が心をすっかり治めているのです。

［『ヒッポリュトス（パエドラ）』〈184-85.〉］

オウィディウスのミュラも、

彼女はよく解っていて、酷いアモルに抵抗し、

独り言ちて「心は何処に連れて行かれるの、私は何を企てているの」と尋ねる。
「神々様、お願いです、哀れみと……とを」
［『変身物語』10.〈319-21.〉］

さらに

――止むことのない情炎に苛まれて、
夜も眠れず、狂おしい願いを想い起こし、
絶望するかと思うと、また望みを遂げようと思い、恥じ入りつつも、
欲望を抱き、どうすべきなのか分からない、……。
〈同書　10. 369-72.〉

彼女はしようとし、やめようとし、嫌悪感に囚われる。

不思議な力が意に染まぬ私を引きずる、欲望と理性は
別のものを勧める。私はより善きものが分かり、正しいと認めるも、
悪しき方に従ってしまう。
〈同書　7. 19-21.〉

おお、欺瞞よ愛よ、奪われし心の狂気よ、
お前たちは私を何処に連れて行くのか。
［ブキャナン〈『十一音節詩集』第4巻〉］

あまたの恋する者たちは、すぐさま、非常に多くの野獣たちと同様、夢中にさせられてしまう。理性が一つの方へと導き、友人、財産、恥、不面目、危険、大洋ほど一杯の心痛が、必ずやそれに続く。しかるに、この狂おしい欲情は、**真っ逆さまに突き落として、**それに均衡するほど別の方向へと重みを加える。それは彼らの完全な破滅、永遠の汚名、敗北であるのに、彼らはその行為に走り、最終的には**理性を失くし、**犬に豚に驢馬にと畜生に落ちぶれる、ユピテルが牡牛に、アプレイウスが驢馬に、リュカオンが狼に〈オウィディウス『変身物語』〉、テレウスがヤツガシラに〈ヒュギヌス『神話伝説集』、オウィディウス『変身物語』〉、カリストが熊に〈オウィディウス『祭歴』〉、エルペノルとグリッルスがキルケの豚になった〈ウェルギリウス『アエネイス』〉ように。というのも、愛欲に身を任せてしまった人が（フルゲンティウスがアプレイウスについて、アルチャートがテレウスについて解釈するように）獣と変わらないということ以外に、これらの才能ある詩人たちがその才溢れる物語や詩で、他に何を暗示したと考えられようか。

私は王であった、兜飾りの羽が教えるように。だが、汚れた暮らしが
これほどの頭頂の羽から汚らしい鳥を作りだした。

［アルチャート『エンブレム集』「ヤツガシラ」（サビヌス『オウィディウス「変身物語」評釈』 より）］

彼らの弱さや呆け具合が明らかに現われるのと同様、盲目さも大いに表に出る、愛の分かちがたき道連れ、よくある徴といおうか。愛は盲目、クピドは盲目と格言が言うように、そしてクピドの信奉者もみな盲目。

蛙を愛する者は誰も、蛙をディアナと考える。

〈ヴァルター編 25531.〉

愛する男は誰でも自らの想い人を賞讃する、たとえ彼女が生来不格好で、器量が悪くても、顔に皺がよっていても、にきびだらけでも、蒼白くても、赤らんでいても、黄ばんでいても、日焼けしていても、白黄色でも、平べったい大顔、あるいは痩せて、貧素で、やつれた顔であっても、顔がどんよりしていて、せむしでも、かさかさ肌でも、髪が薄くても、ぎょろ眼でも、かすみ眼でも、あるいは睨み目でも、たとえ彼女が押しつぶされた猫のようであっても、ひどく歪んだ頭部に、重く、鈍く、虚ろな眼がついていても、眼は黒くて黄色でも、やぶにらみでも、口は雀のようでも、ペルシア人のように鉤鼻でも、鼻は狐のように尖っていて、赤くて、中国風に平たく、大きくても、「**広い豚鼻でも**」、突起していても、歯は突き出て、もろくて、真っ黒でも、不揃いで、褐色でも、眉毛が突き出して、魔女の顎髭があり、彼女の息が部屋中に悪臭をふりまいても、鼻水が冬も夏も滴っていても、顎の下はバイエルン人のように垂れていて、顎はとんがり、耳は垂れ下がり、首は鶴のように長く、曲がってもいても、「**乳房は垂れ下がって、**まるで二つの壺のようであっても」、あるいはまったく反対に乳房が扁平でも、指がひび割れ、爪は長く伸びて汚れ、腕や手首はかさぶただらけで、皮膚は日焼けし、朽ちた死骸のようでも、背中は曲がり、腰が曲がり、足は萎えて、扁平足で、「荒野の雄牛のように腹部は痩せ衰え」、痛風の足で、踵が靴を踏んでいても、足が臭っていても、虱を育てていても、ただの馬鹿、真の怪物、未熟な愚か者であっても、その性格はまったく不快で、声は耳障りで、身振りは粗野で、振る舞いは卑しく、ひどく口やましくても、醜い生意気女で、怠け者で、太った間抜けで、のろまで、痩せた骨だけで、骸骨で、こそこそ窺う女であっても（「**隠されたところはより良いと思う**」〈オウィディウス『変身物語』1. 502.〉）、そして、あなたには彼女がランタンの燃えカスのように見えて、彼女にぜったい夢中にならず、嫌い、憎み、彼女の顔に唾をかけ、彼女の胸元で鼻をならせば、他の男には**愛の治療法**、むさ苦しい、あばずれの、口うるさい、汚らわしい、下品で、淫らで、不潔で、獣じみた売笑婦、おそらく不実で、猥褻で、下劣で、低劣で、粗野で、阿呆で、愚かで、性根が曲がった、イロスの娘、ティルシスの姉妹、グロビアヌスの学識者であっても。しかし彼が彼女にひと

たび恋するならば、彼はこれらすべてにもかかわらず彼女を賞讃し、身体であろうと心であろうと、こうした欠陥や不完全さに気づくことはない。

――まさにこれらのことが
彼を喜ばせる、アグナのポリュプスがバルビヌスを喜ばせたように。
［ホラティウス『諷刺詩』第1巻第3番〈39-40.〉］

彼は彼女を世界のどの女性よりも恋人にしたいのだろう。もし彼が王だったならは、彼女だけが彼の王妃、女王なのだろう。ああ、もし彼が彼女に贈るために、両インド諸島の富と宝を、すなわちガレオン船一隻分のダイアモンド、真珠の鎖、諸宝石の首飾りをもっていさえしたならば、あるいは（四ペンスの仔牛革の手袋の方がお似合いだろうから）何かそのようなちょっとしたものを、彼女に愛の徴として、贈るべくもっているなら、彼女はそれを彼の心からのものとして受けとるにちがいないが、彼は彼女のために幾万ものクラウン貨を費やすだろう」。ウェヌス自身、パンテア、クレオパトラ、タルクイニウス・タナクイル、ヘロデ王のマリアムネ、ブルゴーニュのマリーが生きていたとしても、彼女にはかなわないだろう。

（彼女の容貌は、恐るべき戦争を引き起こした
テュンダレオスの娘に優っている。
［セネカ『オクタウィア』〈775-76.〉］

パリス自身を審判者にせよ）。有名なヘレネも彼女には及ばず、ロドペ山のフィリスも、ラリッサのコロニスも、バビロニアのティスベも、ポリクセナも、ラウラも、レスビアなども及ばない。あなた方の見せかけだけの淑女たちはけっして、彼女ほど美しくない。

生気溢れるパンドラよ、あなたは、すべての神々がもつ
静穏さ、快活さ、優美さ、機知をなんでも所有している。
［リーチ〈『重要なムーサ』3「フォエミナ」75-76.〉］

ディアナ・トリウィアの美しさは何ものでもない、と私は言っていた。
［マントヴァのバティスタ『牧歌』第1歌〈47.〉］

ディアナも、ユノも、ミネルウァも、ほかのどの女神も、彼女とは比べものにならない。テティスの脚は銀のように輝き、ヘベの足首は水晶よりも透明で、アウロラの腕は薔薇のように真紅で、ユノの胸は雪のように白く、ミネルウァは賢く、ウェヌスは美しいが、しかし、これがいったい何だというのか。私には、あなたが優美に映る。彼女だけがすべてである。

――カエリアは、笑うと
ウェヌス、歩くとユノ、話すとミネルウァ。
［アンジェリアーノ〈『エロトパイグニオイン』「カエリアの婚資について」3-4.〉］

美を超える、美の中の美。
［〈スペンサ〉『妖精の女王』第 4 巻第 2 歌〈23. 4.〉］

エフェメルス［エウヘメルス］はアリスタエネトスにおいて、自らの想い人のいくつもの美点を賞讃するあまり、それらについて喧伝し、彼女を擁護して来る人すべてに挑みかかる。「西で美を、東で美を見た人々を、あらゆる場所から来たらしめ、このような卓越した容貌を見たことがあるかどうか、真実を語らせよう」［『恋愛書簡集』〈1.〉12.］。ペトロニウスにおいて、彼の仲良しは、いかなる舌も彼の想い人の美しい容貌について語ることも言い表すこともできない、と叫ぶ。「**あなたが語ったことはまったく及ばないだろう**」〈『サテュリコン』126.〉。

いかなる舌も彼女の完全さを語ることもできず、
彼女の各々の部分に、すべての舌が宿るだろう。
〈シドニー『ペンブルック伯爵夫人のアルカディア』2. 11. 1-2.〉

あなたの周りの恋する者たちのほとんどが、これと同じ気質と見解を具えている。彼女は、**誰にも劣らず、**稀に見る被造物、不死鳥、彼の思惟の唯一の女司令官、彼の欲望の女王、彼の唯一の喜悦である、あの愛の病に罹った海神、トリトンが情感をこめて歌うように。

真白なレウコトも好ましく、また黒いメラエナも好もしいが、
しかしガラテア一人が、あらゆる者よりもはるかに好ましい。
［カルカニーニ、対話篇『ガラテア、〈メレネ、プロテウス〉』］

あらゆる優雅な讃辞、隠喩、世界の最良の事物との誇張的な比較、もっとも輝かしい名称、そして――私は言うが――いかなる心地よく、愛らしく、甘美で、快適で、愉快なものも彼女にとってはあまりに不充分である。

彼女はポイボスとポイボスの妹よりも美しい。

彼のポイベはきわめて美しく、彼女はきわめて明るく、
彼女は太陽の輝きを、そして月の光をかすませる。

星辰、太陽、月、金属、甘く香る花々、芳香、香水、色彩、黄金、銀、象牙、真珠、貴石、雪、彩色された鳥、鳩、蜂蜜、砂糖、香料は彼女を表現することができず、それほどまでに彼女は柔和で、優しく、輝かしく、甘美で、美しい。

――兎の毛皮よりも柔らかだ、……

［カトゥルス〈『詩集』25. 1.〉］

美しいリュディアよ、白く輝く乙女よ、
おまえは、乳と百合を、そして
白い薔薇と赤みを帯びた薔薇を、はるかに凌いでいる、
インドの滑らかな象牙をも。

［ペトロニウス「不完全詩格詩」］

このような記述を、わが英国のホメロス［チョーサ］が美しい女性についておこなっている。

あのエミリは、緑の茎の上の
百合よりも美しく見え、
新たな花々の咲く五月よりも鮮やかに見えた。
というのも、彼女の顔色は薔薇の色と争い、
私はこれら二つのどちらが美しいかが分からないのだ。

［〈『カンタベリ物語』〉「騎士の物語」〈1035-39.〉］

まさに以下の文句によって、ポリュペモスはガラテイアに言い寄る。

白い木犀の花びらよりも白いガラテイア、
牧場よりも華やいで、高い榛の木のよりもすらりとして、
ガラスよりも輝き、子山羊よりも悪戯好きで、……
白鳥の羽根よりも、擬乳よりも柔らかい。

［オウィディウス『変身物語』13.〈789-91, 796.〉］

ルキアノスの機知に溢れた対話篇において、彼女は彼を再び賞讃する。この対話篇を、ヤヌス・セクンドゥスという現代オランダの優雅な詩人が韻文に翻訳している。ドリスと他の海のニンフたちが、彼女の醜く不幸な恋人のポリュペモスのことで彼を非難したとき、この者たちは嫉妬と悪意から話しているのだ、と彼女は応えた。

明らかに、おまえたちはたんなる嫉妬に駆られているように見える。
ポリュペモスは、私を愛するようにはおまえたちを愛さないのだから。
〈ヨハネス・セクンドゥス「ルキアノスによるドリスとガラテイアの対話」38-39.〉

彼女たちには言わせておけばよい。彼は立派な人物だった。そして、エロイーズは自分の恋人のピエール・アベラールにこう書いている。「**もし世界の皇帝アウグストゥスが私を妻に望もうとも、私は世界の皇帝妃であるよりもむしろ、あなたの娼婦であることを選びます**」。「**もしユピテルご自身が私のことを欲したとしても、駄目です**」〈アベラールとエロイーズ『書簡集』「エロイーズによる第 2 書簡」〉。

彼女をいとも忌まわしい被造物であるとあなたは考えるが、田舎者がかつて、ゼウクシスが描いたヘレネの素晴らしい肖像画を、そこに美を見て取らずに非難したときのように、恋に病んだ見物人のニコマコスはこう答えた。「**私の両眼を用いなさい、そうすれば女神と映るだろう**」［プルタルコス〈断片 134.〉］、直ちに彼女を溺愛するだろうと。彼女のあらゆる悪徳を徳と、彼女の不完全さと弱みを完全さ、完璧さと見なすだろう。たとえ彼女の鼻が平たくとも、彼女は愛らしい。もし鉤鼻ならば、堂々としている。もし小さく低ければ、可愛らしい。もし背が高ければ、わがブリテンの勇敢なブーディカのように立派で勇敢である。もし欺くならば、賢い。もし奇怪ならば、上品である。彼女の欠点は欠点ではまったくなく、彼女にはいかなる奇形もない。**それどころか、彼女の排泄物は臭わない。**ソストラトゥスの雌犬、あるいはパルメノの雌豚のように〈テレンティウス『アデルフォ（兄弟）』〉、たとえ彼女が不潔で不愉快でも、あなたは喜んで自分の胸に蛇を抱き、自分の皿に蟇蛙を載せ、彼女を魔女、悪魔、鬼婆と、あなたが思いつきうる限りの汚れた名前で呼び、彼は彼女を別の側面から誉め讃える。彼女は彼の偶像、淑女、女主人、小ウェヌス、星［オウィディウス〈『変身物語』2. 723-24.〉］、女神である。

あなたは私のウェスタ、あなたは私の女神です。
あなたの神聖な神殿は、私の心だけです。
［マイケル・ドレイトン〈『イデア』〉ソネット第 30 番〈13-14.〉］

千の宮廷人の芳香が彼女の顔の中にある。**それはウェヌスやストラトニケスの美しい肖像ではない。**また（ご主人様、）あなたが思っているように、スペインの王女でも王でもありません。違う、違う。そうではなく、彼の神聖な想い人、実際、彼の優美なドゥルシネア〈セルバンテス『ドン・キホーテ』〉、彼の愛するアンティフィラ〈テレンティウス『自虐者』〉のために彼はすべてを捧げ、彼だけが彼女を崇拝する。

彼女と比較すれば、孔雀は見苦しいものと、

栗鼠は憎らしいものと、不死鳥は陳腐なものとなるだろう。
［マルティアリス〈『エピグラム集』〉第5巻第38番〈正しくは37番12-13.〉］

優美、魅力、優雅、快活のすべてが彼女に具わっている。彼は一万の宮廷の女性よりも彼女を愛する。

フリスやネレアを、
あるいはアマリリスを、あるいはガラテアを、
あるいはティトゥルスを、あるいはメリベアを賞讃する者。
お願いですから、その者を黙らせなさい。ルッジェーロの恋人が賞讃されれば良い。
［アリオスト〈『狂えるオルランド』11. 12. 1-4.〉］

それどころか、彼女はすべての神々と女神たちよりも優れている。それゆえ、クィントゥス・カトゥルスは、彼のやぶにらみの友人、ロスキウスを誉め讃えたのである。

お願いです、（天上の神々よ）私の言葉をお許しください。
この死すべき者の顔が神よりも美しいと思われたのです。
［トゥリウス・キケロ『神々の本性について』第1巻〈28. 80.〉］

比類もなく美しい、不思議なほど上品な、神聖な、甘美な、優美な、豪奢な、などのあらゆる大仰な形容辞と情熱的な修飾語、小さな心、軽い接吻、などの可愛らしい縮小辞、そして鳥、鼠、子羊、子猫、鳩、眼、子山羊、蜜、愛しい子、鳩、鶏、鵞鳥、などの案出された心地好い名称を、彼は彼女に与えている。

私の蜂蜜、私の甘美さ、私の心、
私の軽い接吻、私の悦び。
［マルルス『エピグラム集』第1巻「ネアエラへ」〈3-4.〉］

私の生命、私の光、私の宝石、私の名誉、「**美しいマルガレータ、その面前では、世界の貴重なものすべてがつまらぬものに見える**」［バルト〈実際には見いだせない〉］。私の甘美なマルガレータ、私の唯一の悦びにして最愛の者。ロドモンテがイザベラに求愛したとき、

できる限りの言葉と身振りを尽くして、
彼は彼女を、愛しい人、ただ一人の恋人、
心嬉しい慰め、そして甘美な歓びと呼ぶ。

彼のご主人、彼の女神、そんな数々の名で呼ぶ、
恋する騎士が愛しい貴婦人に対するように。
［アリオスト〈『狂えるオルランド』〉第29巻〈正しくは第29歌〉第8連〈5-8.〉］

彼女が纏う衣服、彼女の身なりはなんでも、この上もなく彼を悦ばせ、彼女の手、

おお、なんという指、なんという手を彼女はもっていることか。

愛らしい足、可愛い頭飾り、彼女の甘美な身のこなし、美しい声、話しぶり、ああ、あの可愛い話しぶり、神々しくも愛らしい彼女の顔つき、彼女のすべてが可愛く、愛しく、愛らしく、可愛くて可愛いくて可愛いくて。彼女の名前（どんな名であっても）はまさに、最高に可愛い耳に心地よい名前である。私は今思うのだが、名前には何かしら不思議な力があり、すべての振る舞い、姿、癖、仕草を、彼女が演奏しようと、歌おうと、踊ろうと、彼は讃嘆し、どんな衣装で彼女が歩もうと、その衣装はなんと素晴らしく、彼女に似合っていて、このよう衣装は今まで眼にされたことも耳にされたこともない。

彼女は千もの衣装を着るが、それらをふさわしく纏う。
［ティブルス〈『詩集』4. 2. 14.（現代版では4. 38.）〉］

彼女には何でも好きなものを纏わせよう、

良いと思われるものは何でも言い、為すがよし。
［マルルス〈『エピグラム集』〉第2巻〈「ネアエラに」8.〉］

彼女が身に纏うもの、言うこと、為すことなんでも、彼は誉め讃嘆する。

彼女は何をしようと、彼女がどこに足を向けようとも、
秘やかに美しさを身に纏っていた、そして美しさを追求している、
髪を解いて、降ろしているのがいいとされもし、
髪を結んで、上げているのがいいとされもする。
［ティブルス〈『詩集』〉第4巻「スルピティアについて」〈1615版では正しくは3. 9.（現代版では4. 2.）7-10.〉］

彼女は衣装を纏って美しく、纏わずして全き美となる［アリスタエネトス『恋愛書簡集』1.〈1.〉］。纏っても纏わずとも、どちらも同じ、いつでも彼女は見目麗しく、美しく、綺麗で、可愛い。女

性は男性と同じだけのことを為す。いや幾パラサングも遥か彼方にも、男性より愚かにも弱くもなる。「僕のところにおいで、愛しいリュキア、早くおいで、愛するひとよ。他の男なんてみなサテュロス、ただの道化、君にとっては木偶の坊、君に相応しい人は誰もいやしない」（とアリスタエネトスでのムサリウムは言った［『恋愛書簡集』〈1.〉24.］）。君の面立ち、言葉、仕草、振る舞いなどはみな比べようもなく他の誰にも優る。彼女がモプソスに魅せられた以上には、ウェヌスもアドニスに、パエドラもヒッポリュトスに、アリアドネもテセウスに、シスベもピラムスに執心し、愉悦を覚えることはなかった。

あなたが金盞花なら、私は太陽になり、
あなたが修道士なら、私は修道女になるわ。
〈バラッド「ふたりの愛あふれる恋人たち：乙女の決心と決意」〉

この類のものは何百組でも繰り返してみせることができる。男女ともにこれ以上の大馬鹿や盲目がありうるものか教えていただきたい。かれらの隷属ぶりは何よりも顕著で、愚かさの大きな徴である。

彼らは通常、奴隷であり、囚人、志願従僕、カスティリオーネの称するように、**恋する者は愛する女性の奴隷**［『宮廷人』第3巻］、愛する女性の従僕、囚人、賤奴以外の何ものでもない。「彼は彼女の感情に合うように、彼女を悦ばせるようにと、すっかり自分を作りあげ、エミリアが言ったように、お追従者の下僕。その気遣いや行動のすべて、考えることのすべては、彼女の意志と指図に追随している」。彼は、いとも献身的で従順、情愛深いしもべであり臣下なのである。（クセノポンでのキュロスが巧みに述べているように）「というのも、愛はただの僭主、いかなる病より性悪で、これに捕らわれた人は、みな逃れようとするができず、鉄の鎖に縛られたとするより、一層堅く縛り付けられる［『キュロスの教育』第5巻］。恋に陥るより酷い囚われや隷属はあるだろうか、とキケロは説いている。「女性が支配し、掟を定め、自分自身の欲することをその者に命じ、禁じる、そんな男性は自由人なのだろうか。彼は彼女の命じることを何も拒否しようとせず、彼女の求めるものを与え、彼女が呼べば参じ、彼女が脅せば怖れる、**この者は役立たずの奴隷だと思う**」［『ストア派の逆説』〈5. 36.〉〈カプレット『蔑まれるべき愛について』での引用〉］。さらにキケロが続けて述べるに「恋する者が、始終頭髪を梳る、顎髭を固めて整える、髪に香水を振りまく、顔を純水で洗い、化粧し、巻き毛をつくり、外に出ないまま、おめかしして頭飾りをつけ、装身具を身につけて、お洒落をしたって、なんの役に立とうか」〈カプレット『蔑まれるべき愛について』〉。しかし、これらは、床屋や風呂に行ったり、劇場に行ったりといったつまらないことで、恋する男は、相手の女性が行く処どこへでもついて行かねばならず、彼女を見るために、彼女の家の扉や窓のそばの通りを走り抜けねばならず、あらゆる機会を捕え、つまらない用足しにも出かけ、変装もし、姿を偽り、ユピテルよろしくあまたの姿に偽装もする。毎日彼女の家に出掛け（本当に恋しているなら、きっとそうするであろう）、彼女に仕えたいと申し出、ルクレティ

アの求愛者たちがしたように、部屋から部屋へと彼女について回るのだが、自制することができずそうしてしまう。彼女がいるところに自分もいねばならず、そうしようとし、ずっと話しながら彼女の傍に座らねばならず、そうしようともする。「偶然手袋を落としさえすれば、求愛者の一人や二人、いや三人同時に競って屈んで拾い上げ、それに接吻し、深々とお辞儀をして私に渡す者がいた。私が歩けば、また別の人が進んで腕をもって支え、三人目が、果物、梨や李、桜桃やなんでも私が食べたり飲んだりしようとするものを、口に運んでくれる」と、アレティーノのルクレティアは自慢していた〈『ナンナとアントニアの話』バルト訳『ポルノディダスカルス』〉。これらのすべて、そしてさらなることを、彼は彼女のいるところで為し、家に帰ってからは、トロイラスがクリセイデについてしたように〈チョーサ『トロイラスとクリセイデ』3. 1534-47〉、彼女の振る舞い、言葉、仕草を、いかに彼が愉しんだか、あのような場所で彼女がいかに優しく彼を用いたか、いかに彼女が微笑んだか、いかに彼女が彼に栄誉を与えてくれ、それが限りなく嬉しかったか、を思い出すことが彼の想いに耽るすべてである。それから彼は叫ぶ、おお麗しのアレウーサ、おおわが愛しのアンティピラ、おおこの上なく神々しき面立ちよ、おお美しき気品よと。かと思えばすぐに、五つか七つの曲に合わせて、彼女を讃美するエピグラムやソネットを創るか、そうでなければまた、彼女がいかに彼の奉仕を拒絶したか、いかに彼に接吻を拒んだか、効果的に彼を苦しめるなど、いかに彼を辱めたかなどと思い巡らす。そしてこういった事は、櫛と鏡の間の、マドリガルとエレジー等の間の運動で、彼が再び彼女に会うまでの思考である。しかし、このことのすべては緩やかで穏やか、彼の骨折りや束縛のほんの一部で、猟師だって獲物のために、鳥撃ちも楽しみのために、兵士だって町を略奪するために、恋する男が愛する女性の好意を得るためにするほどの骨折りをしようとはしないだろう。

私自身がお供になりましょう。ゴツゴツの岩だって
恐ろしい猪だって突き出た牙で、私を動かすことはできません。
〈オウィディウス『名婦の書簡』4. 103-04.〉

それはパエドラがヒッポリュトスに言ったのと同じである。いかなる危険も怖れさせはしない、なぜなら、それが真実であることを詩人たちが心喜ぶならば、「愛」はマルスとウェヌスの息子であるからである。「愛」は母親から快楽、悦楽、優美さを受け継ぎ、同じように、父親から堅固さ、勇猛、度胸を受け継いでいる。そして聖ベルナールの「**愛よりか弱いものはなく、愛より獰猛なものもない**」は本当である。一旦恋に落ちてしまったなら、男は女性に会うために、夜も昼も、何マイルも走り、馬を駆けて行き、暑さにも寒さにも耐え、霜、雪、雨、嵐の中でも、歯が脳天でがちがちいうまで待つ、あの北国の風も雨も彼の愛の炎を鎮めたり消したりすることはできない。「**深々とした深夜だって彼を躊躇させることはなく**」、空腹にも渇きにも耐え忍び、「すべてを突き抜け、すべてを突き破り、愛が道を切り開き」、万難を排して彼女の許へと進む。「**山々は越えやすく、川は渡りやすく思われる**」〈サン・ティエリのウィリアム『愛の本性と威厳につ

いての論考』、当時聖ベルナールの著とされることがあった〉。彼は大洋をも泳ぎ渡り、アルプスやアペニンやピレネーの山脈も馬で越えてゆく。

火も海の波も暴風も
越えていく心準備が彼にはできている。
［プルタルコス『愛をめぐる対話』〈17.〉］

剣が切っ先を下に向けて降ってこようと、明るかろうと暗かろうと同じこと。

（ファウヌスは闇を通り抜けて、露に濡れた洞窟へとやってくる）
〈オウィディウス『祭暦』2. 332.〉

愛する女性の美しさゆえに、男はヘラクレスの十二功業をも引き受け、危険にも耐え、それらを苦としない。ピエトロ・カプレットが言ったことには「彼らが為し遂げる大変な危険、彼らが戦うそれぞれの戦いについて、彼らがいかに生命をかけて窓に這い寄り、頭から真っ逆さまに入り込み、壁をよじ登って愛しい人に会いに行くのかについて、何と言おうか」（軋む音を立てないように扉の蝶番に油を塗っておいて、足音を忍ばせ、泳ぎ渡り、歩いて渡り、用心して、等々）、「そして、もし驚いたりしたら、窓から飛び出て、頭から真っ逆さまに落ちて、脚や腕を怪我したり骨折したり、時には生命まで落とすこともある」［『蔑まれるべき愛について』第１巻］、カリストが愛しいメリバエに対してしたように〈ロハス『セレスティーナ』〉。彼ら自身の告白、不服、嘆き、好み、望み、酷な試練やこの種の骨折りを聞いてみるがいい。ヘラクレスはオムパレに仕えて、エプロンを身につけ、糸巻棒を手に取って糸を紡いだ。兵士トラソはあまりにもタイスに従属したばかりに、彼女の喜ぶことは何でもしようと心に決めた。「**われとわが身をタイスに捧げよう、彼女の喜ぶことをしよう**」［テレンティウス『宦官』第５幕第８場］、私は彼女に仕えるのだと。ピロストラトスは愛する女性への手紙の中で、「愛するひとよ、あなたが望むのなら、私は喜んで死にます。あなたの星が焦がし、果てさせた者の渇望などは鎮めましょう。泉も川も来るもの拒まず水を飲ませます、あなたは飲んではいけないとは泉は言いません、林檎もあなたは食べてはいけないとは言いません、美しい草原も歩いてはいけないとは言いません、ただあなただけは、私があなたに近寄ること、会うことを許してはくれません。軽蔑され蔑まれて、私は悲しみゆえに死んでゆきます」〈『書簡集』26.〉と書いている。ペトロニウスにおいて、ポリエヌスはキルケが彼に対してただ不機嫌になったとき、剣を抜いて、彼女に自分を殺すか、突き刺すか、死ぬまで鞭打つかするよう頼んだ、そして自ら裸になり、まったく抵抗をしなかった〈『サテュリコン』130.〉。**長い航海の難儀もものともせず、**日本へと旅に出る別の者もいるだろう。また三人目の男は（彼女が命令すれば）十二か月間も一言も発さず、彼女の命令はこの上もなく不可侵と言えるまでに順守されるに違いない。四人目は、ヘラクレスからその棍棒を取り、スペ

インの『セレスティーナ』では、隊長とともに、愛するアレウーサのために十人を殺すだろうし、彼女の口から出た一言ゆえに盾をまるで林檎のように、真っ二つに断ち切りも、人を蠅のごとくぴしゃりと叩きのめしもする〈ロハス『セレスティーナ』バルト訳『ポルノボスコディダスカルス』〉。「**いかなる死に方で彼が殺されてほしいかを選ぶがいい**」。マントヴァのガレアトゥスは、もう少しさらなることをした。というのも、男が町の美しい娘への恋からほとんど狂気に陥ったとき、娘は、彼が彼女のためにどこまでするのか知ろうと、愛しているならポー川に飛び込むよう命じた。男はすぐさま橋から真っ逆さまに飛び込み、溺死した［ガスパル・エンス〈実際は異なる〉］。ティキヌムで同じような熱情に駆られていた別の男は、彼の想い人が、たまたま（傷つける気はなかったと言っておきたい）首を吊れと命じたところ、次の日の夜、彼女の家の戸口で首を吊った。「金銭は（クセノポンが言うには）いとも受け容れられるべき、喜ばしい客ではあるが、私はそれを、他の人たちから受け取るより、むしろわが愛しのクリニアに与えたいと思う。他の人たちに命じるより彼に奉仕したいと思う。自分が安閑として暮らすより、彼にこき使われたいと思う。安全に暮らすより、彼のために危険を冒したいと思う。というのも、世界中の誰よりもクリニアに会いたい、しかも彼だけよりも他のすべてのものを見たい、私は彼を見ることができないので、夜や眠りに怒りを感じ、わがクリニアを見せてくれるから、光と太陽にありがたく思う。彼のためなら私は火の中にも飛び込もう、そしてもし、あなたが彼に会いさえすれば、あなたも同じように私と一緒に飛び込むだろうと思う」［『饗宴』〈4. 5.〉］。してほしい同様のことをピロストラトスも愛する人に言う、「望むことを私に命じてください、私はそれをいたします。海へ行けとお命じ下さい、私はすぐさま海に消えましょう。幾度もの鞭を与えてください、喜んで受けましょう。火の中を走り抜け、あなたの足元に身も心も投げ出します。もうお終いです」。アエオルスもユノに同じようにする。

ああ、女王様、あなたのお仕事はお望みになるものを
お探しになること、私にとっての神命は命じられたことを遂行することです。
〈ウェルギリウス『アエネイス』1. 76-77.〉

ヒッポリュトス様、私を妹とでも、召使いとでもお呼びください、
召使いと。私は誰よりも良くお仕えいたします。
もし、深い雪の中を行くようにと、あなたがお命じになるなら、
私はピンドスの凍える峰々も厭いません。
もし、火の中を行けとお命じになるのなら、剣の方へ喜んで
胸を捧げに、敵の軍隊へも二の足を踏みません。
ここで、お命じになるのはあなたに、それをおこなうのは私に相応しいのです。
［セネカ『ヒッポリュトス（パエドラ）』第2幕〈611-16, 18.〉、
5行目についてはプロペルティウスにも同様の記述あり］

ルキアノス［『愛する者たちの談話』〈正しくは偽ルキアノス『愛する者たち』46.〉］の中でカリクラティデスは、突如次のような情熱的な話を始める。「おお、天上の神よ、私の想い人の前に座り、彼女の甘美な声を聴き、彼女とともに出歩き、ほかのあらゆる用事も彼女と一緒におこなうために、私にこの生命を永遠にお与えください。私は彼女が働くときに働き、彼女が船に乗るときに船に乗ろう。彼女を嫌う者には必ずや私を嫌うようにさせてほしい。そしてもし僭主が彼女を殺すならば、彼に私を必ず殺してもらいたい。もし彼女が死なねばならないなら、私は生きていたくない。そして一つの墓がわれわれ二人を包み込むのであってほしい」。

死にゆく彼女が、私の愛を死にゆかせ終わらせるだろう。

［ブキャナン〈『シルウァエ』3. 94.〉］

アリスタエネトス［『恋愛書簡集』〈2.〉21.］の中でアブロコモスは、彼のデルピアに同様に哀願している。

――私はあなたとともに生きることを望み、あなたとともに喜んで死のう。

［ホラティウス〈『オード集』3. 9. 24.〉］

それは、テアゲイネスが彼のカリクレアに対して、「あなたの愛をひたすら享受するために、私をすぐに死なせてください」〈ヘリオドロス『エティオピア物語』2. 4.〉と語るのと同じ口調であり、レアンドロスが彼のヘロに対するのも同じ口調で、彼は海の波に、恋人のところへ秘かに連れて行き、帰りに自分を殺すように懇願した。

私が急ぎ行くときには思いやりを、帰るときには溺れさせて。

［マルティアリス『見世物』25b. 4.］

彼らのすべてにとって、こういった場合に死を軽蔑し、死を願い、死に立ち向かうのが、共通の気質である。「**というのは、彼らにとって野獣も火炎も絶壁も海峡も短剣も輪縄も由々しきものとは思われないからで、**死ぬことが彼らの欲求だからである」（テュロス〈のマクシムス『説教集』10.〉）。

彼はけっして死を恐れず、剣そのものに
立ち向かうことを望む。

〈セネカ『メデイア』593-94.〉

千の龍や悪魔が門を護っていようとも、ケルベルス自身、スキュラ、そしてプロクラステスが待ち構えていようとも、さらに、その道が、燃え盛る炎と灼熱の鋤先によって地獄のように危険で近づきがたいとしても、彼はこのすべてに挑むだろう。そして、ピエール・アベラールが彼のエロイーズのゆえに自らの陰茎を失ったときに、驚くべきことに、彼はその切断でなく、生命自体を危険にさらしたのである［ピエール・アベラール『書簡集』第1巻「災厄の記録」］。というのも、いかに多くの勇者が、昔日にクレオパトラと一夜を過ごすために自らの生命をあえて失ったであろうか。そして、死の時と瞬間には、フランスで殺されたゼルビーノのように［アリオスト〈『狂えるオルランド』24. 161.〉］、バーバリーで殺されたブランディマルテのように［同書〈41. 101, 42. 14.〉］、アルシータがエメリに対してそうだったように、自分の愛しい想い人を思い出すことが、彼らの唯一の慰めなのである。

——彼は死を感じ取り、
両眼は霞んで、息が絶えました。
だが、なおも愛する人に眼を向けていました。
彼の今際の際の言葉は、「憐れみを、エメリ」でした。
彼の魂は場所を変えて、出てゆきました。
どこからかもどこへかもわかりませんが。
［チョーサ〈『カンタベリ物語』〉「騎士の物語」〈1947-50.（I(A)2805-10.〉］

ゴブリアス隊長が不運な事故によって致命傷を負ったとき、（祈禱する代わりに）「**なんて私は惨めなのか、と彼は叫ぶ**」。私の最愛のロダンテに会う前に私は死なねばならないのか［テオドレ・プロドロムス『愛の歌』第6巻］。「**こうして愛は死を**」（とわが著者［プロドロムス］は言う）「**あるいは人間に属することをすべて追い払う**」。こうして愛は死自体に勝利し、それを軽蔑し、侮辱する。十三名の立派な若者たちは、エーリスの王オイノマオスの娘、美しいヒッポダメイアのために自らの生命を失った。死か勝利かという難しい条件が提案されたとき、彼らはそのことを考慮に入れず、愛のために勇敢に死んだが、最後にペロプスが策略によって彼女を獲得した〈ヒュギヌス『神話伝説集』84、アポロドロス『書簡集』2. 3-7.〉。多くの勇者たちは、スコイネウスの娘アタランタとの結婚を望んで、自らの高貴な血をかけて向こう見ずにも挑み失敗したが、ついに、ヒッポメネスがいくつかの黄金の林檎によって幸運にも、自らの求愛をものにした［オウィディウス『変身物語』第10巻〈560ff.〉、ヒュギヌス〈『神話伝説集』〉185章］。その昔、ペルセウスはアンドロメダのために海獣と闘った。われらが聖ゲオルギオスは、龍に身をさらしていたシバの王の娘を、恐ろしい戦闘によって解放した（『黄金伝説』に我々は依拠しているのだが）。我々の彷徨う騎士たち、そして今日のランスロット卿たちは、——私はそう望むが——「淑女たちの従者」、「太陽の騎士」、「サウサンプトンのベヴィス卿」、あるいは有名な同類の士のように、貴婦人たちの愛顧を得ようとして挑戦するだろう。

オルランドは、長い間、愛しい麗しの
アンジェリカを愛してきた。そして彼女のために
世界中で、遠い国でも近い国でも
高貴な試みをおこない、企てる。
［アリオスト〈『狂えるオルランド』〉第1巻〈正しくは巻はなし〉第1歌第5連〈1-4.〉］

同様なことをおこなわない者は真の卑怯者、臆病者、冷血漢、野獣であるが、しかし彼らは、そのようにおこなうだろう、確実におこなうだろう。というのは、当世の恋する者たちにとって、より多く語り、おこなうこと、両腕を突き刺すこと、血を大量に流すこと、あるいは、自分自身の親指を噛み切ったテッサロニアのテロのように［プルタルコス『愛をめぐる対話』〈17.〉］、「**ライヴァルと比肩しようと挑発して**」、彼のライヴァルと同じようにおこなうことは、普通の出来事である。彼らにとって、自らの淑女や想い人のために戦場で戦い、一騎討ちに挑むことは頻繁に起こることである。

お互いに（彼らはきわめて激しく交戦したので）
馬の足もとへ落下させる。
［〈スペンサ〉『妖精の女王』第4巻第1歌〈41. 7-8.〉］

そして、それから立ち上がり、再び戦いを始める。

そして彼らは斧によって激しく打ち合ったので
鎧の板金も鎖帷子も戦いに持ちこたえることができず、
腐った木のように粉々に大破した、
そして火花が、雷鳴ののちの稲妻のように燦めいた。
［〈スペンサ〉『妖精の女王』第4巻第3歌〈15. 3-6, 8.〉］

そして、彼女ために反目し、たいそう長く戦う、「彼らのヘルメットも丸楯もすべて破壊され、剣は多くのノコギリのように切り刻まれるまで」〈ロハス『セレスティーナ』バルト訳『ポルノボスコディダスカルス』〉。というのは、彼らは、彼女がいかなる仕方であろうと傷つくのを見るべきでなく、彼女について悪し様に言うのは不敬であり、深い敬意を表さずに彼女の名を挙げるのは無礼だからである。これらの男たちに共通なのは、瓶の底まで一マイルあろうとも（いかなるものが混合されていようと）、膝をむきだして跪き祝杯をあげることである〈マルティアリス『エピグラム集』1. 71. 1.〉。彼女が彼らに命じるならば、彼らは裸足でエルサレムまで、偉大なカーンの宮廷まで、東インドまで行くだろうし〈パルテニオス『恋人たちの情感について』第8章〉、

彼女の帽子を飾るために一羽の鳥を捕まえてくるだろう。そして、ドレイクとキャンディッシュとともに、愛しい彼女のために世界中を、**逆風にめげずに**航海し、ヤコブがラケルにおこなったように、七年間を二度にわたり奉仕する。同様なことをサレルノ侯タンクレディの娘、ギスモンダは彼女が心から愛するグィスカルドに対しておこない、彼が死んだときには彼の心臓を食べる［ボッカッチョ〈『デカメロン』4. 1.〉］。あるいは、アルテミジアのように、夫の骨を粉々に砕いて飲み干し〈アウルス・ゲッリウス『アッティカの夜』10. 18.〉、こうして彼女自身の中に彼を埋葬し、テセウスやパリスよりも激しい責め苦に耐える。（アリスタエネトスが［『恋愛書簡集』第2巻17.で］述べているように）「**そして、ウェヌスは犠牲や香よりもこれら〈の捧げ物〉によって讃えられる**」。普通、彼らは自らの想い人のためにはいかなる苦痛も、いかなる苦労も、いかなる苦役も厭わず、従者として愛し、崇め、彼女ひとりだけでなく、また彼女の友人や従者すべてを、彼女のゆえに抱きしめ、抱擁し、彼女の犬、肖像、彼女が身につけているものすべてを聖遺物のように崇拝する。彼らは、彼女のところから来る男ならば誰でももてなし、報い、必ず交際し、常に彼女のことを想い起こしながら、常に彼女について語りながら、彼にあらゆる奉仕をする。

というのは、たとえあなたが愛するひとが不在であっても、彼女の似姿は
あなたとともに在り、彼女の甘美な名前はあなたの耳に残り続けるからだ。
［ルクレティウス〈『事物の本性について』4. 1061-62.〉］

彼から彼女のもとに来る運搬人こそが、もっとも喜ばしい客であり、そして、もし彼が手紙をもってくるならば、彼女はそれを二十回以上いつも読む。そして、ルクレティアがエウリアルスからの手紙におこなったように、「手紙に千回も接吻して、それからまた読む」［エネア・シルヴィオ〈・ピッコローミニ〉］。そして、ケリドニアがフィロニウスからの手紙に甘い接吻を何度もしたのち、その手紙を胸に入れた［アリスタエネトス『恋愛書簡集』2. 13. 2.］。

そして何度も接吻し、そしてしばしばじっと眺め、
そして立ち去ろうとする配達人を引き止める。
〈マーロウ『ヒアロウとレアンダ』2. 81-82.〉

そして、彼女は多くの愛らしい質問を、彼はどんな様子だったのか、彼は何をしたのか、彼は何を言ったのか、と何度も繰り返す。結局、

彼は自らの想い人を喜ばせることを願い、私のことを、侍女のことを、
下男のことを、下女のことを、そして私の犬さえも喜ばせることを願う。
［プラウトゥス『驢馬物語』〈183-84.〉］

もし彼が彼女の名残のものを何かを、コルセットの紐を、彼女の扇の羽根を、靴紐を、留め紐を、指輪を、髪留めを

彼女の両腕から、あるいは彼女の思わせぶりの
指からようやく外した印を
［ホラティウス〈『オード集』1. 9. 23-24.〉］

得るならば、彼はそれを恩恵として、自らの武具に、帽子に、指に、あるいは心臓の隣に纏う。彼女の肖像を一日に二度崇め、そして二時間はそれから眼を離さない。ラオダミアがプロテシラウスのゆえにおこなったように、彼が戦争に赴いたときには、「彼女は自分の前に彼の肖像画を手にして家で座っていた」〈ヒュギヌス『神話伝説集』104、アポロドロス『書簡集』3. 30.〉。彼女の靴下留めや腕輪はいかなる聖遺物よりも貴重であり、彼はそれを自分の小箱に収め（おお、祝福された遺物よ）、そして毎日それに接吻する。彼女が面前にいるならば、彼の眼はけっして彼女から離れず、彼女が飲んだところで、もし可能ならば、彼女が口をつけたところで彼も飲むだろう。もし彼女が不在ならば、彼は彼女が歩くところで歩き、彼女がいつも座る木の下で、その木陰で、その座った場所に座るだろう。

――そして、惨めな者よ、彼は戸口に接吻する、
〈ルクレティウス『事物の本姓について』4. 1179.〉

多くの年月のあとでも時折、彼女がはるか遠くに居り、幾多のマイルも離れているとしても、彼は、ずっとそちらの方に歩きたいと思い、自分の部屋の窓がそちらに向かっていてほしいと熱望して、彼女が住んでいる家の側の、河岸（きわめて遠いのだが）を歩くことを愛している。彼はその岸辺に風が流れるのを熱望している。

おお、何度私は素速い西風に語ったことか、あちらに。
おまえは美しいアマリュリスを見るであろう、幸せな風よ。
［ブキャナン『シルウァエ』〈3. 29-30.〉］

彼は彼女に風によって便りを送る。

アルプスのそよ風よ、穏やかな山々からのそよ風よ、
彼女にこれをもたらすように。
［フラカストロ『ナウゲリウス』］

彼の心はいまだに彼女とともにあるので、彼は彼女との知り合いの誰かと話し会うことを欲し、彼女について語ることを欲し、彼女を賞讃し、讃嘆して、悲しみ、嘆き、彼女のためのいかなるものをも欲し、彼女に会う機会を得ることを欲する。ああ、彼が彼女との逢瀬さえ享受できるならば。そのように、ピロストラトスは彼の想い人に語った。「ああ、彼女が踏みしめた、幸福な地面よ、もし彼女が私を踏みしめるならば、私もなんと幸福であろうか。私が思うに、彼女の容貌は川の流れを止め、そして彼女が外出すると、鳥たちは歌い、彼女の周りに集まるだろう」。

谷間は微笑み、快活な渓谷は微笑むだろう。
緑の大地は、すぐに花で包まれるだろう。
［『書簡集』〈37.〉］
そよ風はすべてアンブロシアを漂わせるだろう。
〈ウェルギリウス『農耕詩』4. 415.〉

「彼女が野原にいるとき、彼女はいかなる花よりも美しい。というのは、花の美しさは一日しか続かず、川は喜びを与えても突然消滅するが、あなたという花は消失することがなく、あなたという流れは海よりも大きいからである。もし私が天空を見上げるならば、私が考えるに、私は太陽が落下して地上で輝いているのを、そして太陽の代わりに、私が欲するあなたが輝いているのを見る。もし私が夜空を見上げるならば、私が考えるに、私は二つのひときわ輝かしい星を、すなわち金星とあなた自身を見る」［ピロストラトス『書簡集』〈10.〉］。すこし後に、彼は自分の想い人に次のように言い寄る。「もしあなたが町から出ていくならば、その町を護っている神々は、あなたを見つめるために後を追うだろう。もしあなたが海へ出航するならば、きわめて多き小舟のように、彼らはあなたを追うだろう。あなたという海へと流れこまない川があるだろうか」〈同書〉。別の書簡では、彼は嘆き、むせび泣き、誓う。彼がもっているのは引き裂かれた心、粉々に砕け散った心で、彼の中で分解し、融解し、あるいはまったく彼から消え去り、おそらく彼の想い人の胸に至っている。彼は炉の中におり、火の中のサラマンダーで、愛の熱によって焦がされている。彼は自ら彼女が座る鞍に、彼女が嗅ぐ花束になることを望む。そして、もし彼が彼女の靴下留めで絞め殺されようとも、彼は吊されるのを嘆かないだろう。彼女が彼女自身の手で彼を殺すというならば、彼は明日にでも喜んで死ぬだろう。

＊太字表記は原文がラテン語であることを示す。
＊原注には、典拠の該当箇所と、テクストの引用が見出される。典拠は［　　］内に示し、テクストは訳出に反映し、必要と思われる部分は［　　］に補った。
＊その他の補注や訳出の補完は〈　　〉に示した。

テクスト

（底本）Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy* (*Oxford English Text*) (6 Vols.). Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

（参考）Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy* (Facsimile) (*The English Experience*). Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It.* Ed. with an Introduction by Holbook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied in an All-English text.* Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.

既訳

「第 1 部 第 1 章 第 1 節」　『京都府立大学学術報告　人文・社会』　第 59 号 2007 所収
「第 1 部 第 1 章 第 2、3 節」　『京都府立大学学術報告　人文・社会』　第 60 号 2008 所収
「第 1 部 第 2 章 第 1 節」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 61 号 2009 所収
「第 1 部 第 2 章 第 2 節」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 62 号 2010 所収
「第 1 部 第 2 章 第 3 節 第 1-10 項」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 63 号 2011 所収
「第 1 部 第 2 章 第 3 節 第 11-14 項」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 64 号 2012 所収
「第 1 部 第 2 章 第 3 節 第 15 節」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 65 号 2013 所収
「第 1 部 第 2 章 第 4 節 第 1-6 項」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 66 号 2014 所収
「第 1 部 第 2 章 第 4 節 第 7 項 - 第 5 節、第 3 章 第 1 節 第 1・2 項」
『京都府立大学学術報告　人文』　第 67 号 2015 所収
「第 1 部 第 3 章 第 1 節 第 3・4 項－第 3 節、第 4 章」
『京都府立大学学術報告　人文』　第 68 号 2016 所収
「第 3 部 第 1 章 第 1 節 第 1 項 序－第 2 節 第 2 項」
『京都府立大学学術報告　人文』　第 69 号 2017 所収
「第 3 部 第 1 章 第 2 節 第 3 項－第 2 章 第 2 節 第 1 項」
『京都府立大学学術報告　人文』　第 70 号 2018 所収
「第 3 部 第 2 章 第 2 節 第 2-3 項」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 71 号 2019 所収
「第 3 部 第 2 章 第 2 節 第 4-5 項」　『京都府立大学学術報告　人文』　第 72 号 2020 所収

（2021 年 10 月 1 日受理）

おかむら　まきこ　（文学部　共同研究員）
いとう　ひろあき　（専修大学　教授）